松平藤九郎始末（五）医療の神髄

首巻き春貞外伝

主な登場人物

・松平藤九郎
柳生新陰流の使い手だが、体を壊して屋敷の門前で倒れているところを助けられた。その後春江館道場師範として屋敷に留まることになっただけでなくお蘭と夫婦になり新しい当主になった

・お蘭
松平春貞と亡き妻幸江の娘理子が産んだ一子。春貞の孫でただ一人の血縁者

・松平春幸
藤九郎とお蘭の一子

・井之上新界
小田原の廻船問屋の次男。長崎に遊学し阿蘭陀医学を学んだ帰りに小川笙船の門を叩き向島診療所で働くことになった。またおよしを妻に娶り診療所二代目肝煎。松平春貞亡き後、屋敷を守ってきた。およしは他界

・井之上新一郎
井之上新界とおよしの一子。長崎へ遊学し吉雄耕牛に蘭学と阿蘭陀医学を学ぶ

・静香
父の無念を知らしめようと武家屋敷の刀を盗む女賊だったが、春貞の屋敷で捕らえられ奉公することに。亡き公儀隠密弥三郎に女忍びの技を伝授され春貞亡き後、屋敷の奥向き全般の責任者となっている
・お文
もともとは向島診療所の患者で左足を切断する手術を受け、井之上新界設計の義足をつけている。夫が亡くなった後、縁があり娘共々診療所の手伝いとして雇われる。診療所は勿論、屋敷内の雑用を一手に取り仕切る働き者
・お輝
お文の一人娘で母を助け、いまでは女医者として働いている。井之上新一郎の妻
・おたみ
生んだ子が死産だったとかで実家を追い出され途方にくれているとき松之助の乳母として雇われた。天野三十郎の女房となる
・松平藤文（松之助）
屋敷の門前に捨てられていたが、お文を母として、おたみを乳母として成長

し、春幸の養育係に命じられた
・吉太郎
今は亡き留吉と奈美の一子。長崎留学から戻った後は新一郎と一緒に診療所を手伝う。主に眼科と歯科を専門とする
・久世仙之助
新しい家臣団の長で新陰流の使い手。妻は美保
・土屋長四郎
竹内流柔術の技を持って家臣に加わる。妻は長屋の女だったお染
・天野三十郎
家臣の一人で天流・宝蔵院流の槍の使い手。巨漢で大食漢。妻はおたみ
・神保金之助
家臣の一人で無外流を使う。お園と結ばれる。
・長坂角之新
家臣の一人で新陰流を使う。妻は淑子
・お園
門前に傷を負って倒れていた盲目の若い女。恐るべき居合いの使い手であるこ

とを見込まれ家臣となる。神保金之助と結ばれた

・岸部兵庫

追っ手から逃れる旅を続けていたとき藤九郎らに助けられ、娘路子と共に屋敷に仕える身となる

・岸部路子

兵庫の娘。主に診療所助手として活躍

・重三

舟が操れるということで、お文の推挙で下働きとして雇われる

・西脇与五郎

東軍流の使い手。三島の雲助宿で藤九郎と出会い、家臣となる

・等子

日本橋の小間物屋の老舗櫛本屋の一人娘だったが出戻った後に西脇与五郎と結ばれる

・田次郎

旅の途中で知り合った博徒だった爺。春貞や米道格左衛門、夏穂を知っている

・又八
田次郎の世話で屋敷に加わった老爺だったが、実は若い頃は武士であり藤九郎の後輩でもあった
・勘介
元は北町奉行所同心三島弥太郎手下の岡っ引き。縁があって藤九郎に仕える
・伊丹助三郎
南町奉行所常町廻り同心。初代当主春貞の親友だった伊丹鉄太郎亡き後、一人娘に養子に入り同心のお役を受け継いだ。今では藤九郎の友
・吉次
伊丹助三郎から十手を預かる金杉水道町の岡っ引き。いまは亡き金次の息子
・相模屋清右衛門（二代目）
日本橋両替商相模屋の主人。
・太子堂富勝
仏壇仏具の大店太子堂の主。富吉の息子

・越後屋三井高清

呉服商ならびに両替商。江戸一番の豪商

松平藤九郎5_20210323 hagoromo

首巻き春貞（外伝）腐敗　目次

第一章　運命の出会い　九頁
第二章　徳川斉朝の来訪　三十六頁
第三章　与五郎の涙　八〇頁
第四章　無名の名医　一〇三頁
第五章　春幸の妹　一四七頁
第六章　腐敗　一六九頁

第一章　運命の出会い

一

享和改め文化一年（一八〇四年）の正月のこと、向島の松平藤九郎の屋敷は祝いの気分で活気に溢れていた。
ひとつには昨年末に神保金之助とお園が祝言をあげ、暮らし始めたことがあった。
当初お園は目が見えない女房では金之助に多々迷惑をかけるのではないかと及び腰であったが、実際には日々仲睦まじいところを見せていた。
下働きの長、お文などは、
「なんかさあ、お二人の側にいるとこっちまで温かい気分になるよ。特にさ、お園さまの笑顔が多くなったのが嬉しいじゃないか」
と、まるで母親みたいに喜んでいた。

二つ目には五日前のことだが、久世仙之助の妻美保および土屋長四郎の妻お染が懐妊していることが分かったからだ。

さてそんな温かな気分に包まれた早朝、藤九郎は長い文を認(したた)めていた。それは尾張十代藩主徳川斉朝(なりとも)宛であった。

実は…藤九郎は先代の九代藩主徳川宗睦には多々世話になり、またその礼も含めて尾張へ旅をしたこともあったが、四年前の一月に宗睦は六十七歳で死去し、斉朝が継いだため、藤九郎らとの縁もこれで切れるのではないかと危惧していた。何故なら、宗睦の実子としては、好君との間にもうけた長男・治休、次男・治興などがいずれも早世、さらに支藩の美濃高須藩から養嗣子に迎えた甥・治行とその子・五郎太も早世し、続いて迎えた養子の甥・勇丸も早世したため、将軍徳川家斉の四男敬之助を養嗣子とした。しかしまたも早世し、寛政十年（一七九八年）四月に一橋治国の長男斉朝を養嗣子として迎え、宗睦死後の寛政十二年一月に跡を継がせた。このため、尾張は徳川義直以来の男系の血筋は断絶したことになったからだ。

ただし、斉朝の実母は二条治孝の娘・乗蓮院であり、治孝の父・二条宗基の実母

は尾張藩四代藩主徳川吉通の長女信受院である…。つまり斉朝は吉通の来孫（曾孫の孫）であり、尾張徳川家の血を女系で引いているのであった。
そんな訳だったから徳川宗睦が死去したとき、葬儀に参列は出来なかったものの香典と共に深い弔意を示した藤九郎だが、新しい藩主斉朝らからは連絡もなく四年が過ぎていた。ために初代当主松平春貞から面々と続いた尾張藩との縁もこれで切れてしまったと考えていた。
しかし一週間前に斉朝の花押がある文が届き、春の参勤で江戸に入った際に屋敷を訪れるとの意思表示があったので急ぎ返事を認めていたのだ。
そのとき、
「御館さま。こちらでしたか…」
久世仙之助が姿を見せた。
「おう、入れ」
「はっ。文をお書きでしたか…」
座しながら仙之助が言うと藤九郎は、
「うむ。尾張の斉朝さまにご返事をな、認めておったのじゃ」
と言うと、

「尾張への旅からすでに六年も経っておりますなあ…。それにしても失礼ながらここに来ての斉朝さまのお文、どのようなお考えがあってのことでございましょうや」

仙之助が些か心配そうな顔で問うた。

「そうよなあ…。先の宗睦さまは春貞さまと竹馬の友であり、春貞さまを「兄様」と慕っていた八代藩主宗勝のご次男。父君宗勝さまのお子故、宗勝さまご生前にはお目にかかったことはないものの父君から我らのことを多々聞かされておられたという経緯があろうな。

しかし失礼ながら斉朝さまは宗睦さまのお子ではない…。

これまでのご縁に関わる経緯などご承知ではないであろう」

「はい」

「しかし申すまでもなく尾張十代藩主であらせられる。我らにあらためて近づく謂われはないが、よき縁が復活するのであれば喜ばしい事よ」

藤九郎が窓を少し開けると冷たい風が吹き込んできた。

「ただ…」

「はい」

「斉朝さまはまだ御年十一歳だ。ご本人の意志というより附家老成瀬正典（なるせまさのり）さまのご意志かも知れぬな。成瀬さまは遣り手と評判のお方、その点が少々気になると言えば気になるがのう」

藤九郎は窓を閉めながら呟くと、

「成瀬さまは書画の技が巧みで、馬を育てるのに秀でておられると聞きましたな」

仙之助が応じた。

「ともあれ、いま我らは尾張と何の関係もないし貸し借りもない。相手は御三家筆頭格だがそもそも我らに権力は無縁。出来ることなら面倒なことにならなければよいがのう…」

と藤九郎は一呼吸入れ、

「それはそうと、お前も今年中には子の父となるわけだのう」

と笑顔を作った。

「はっ。しかし嬉しいのは間違いないことですが、どんな顔をしていたら良いものか、足が地に付きませぬ。しかし、とにもかくにも母子共に元気であって欲し

いものです、御館さま」
「そうさな…。しかし承知のようにここには名医がおる。新一郎の女房どのは赤子を取り上げた数は数え切れないと申していたし、安心して任せることじゃ。ふむ、名医といえば与五郎は今日も診療所かな」
藤九郎が問うと、
「そのようでございますな。先ほど新界先生に伺いましたが最近では日に三〇〇名ほどの患者が押し寄せるようでございまして…。まさか断るわけにはいかずに先生方は粛々と診断なされているようですが西脇どのの存在は大変助かっていると仰せでした」
仙之助が藤九郎の反応を伺うように答えると、
「俺は…お主もそうだが、ただただ剣のみしか取り得のない者として家臣に加わってもらった覚えはない。承知のようにすでに剣の時代は終焉に向かっておるとつくずく思う。
医療で広く貢献できるのではあればそれもひとつの未来であろうよ」
藤九郎はそう言いながら、
「とはいえ、俺は剣しか知らぬがなあ」

松平慶九郎5 20210323 hagoromo

と笑った。

二

一方その診療所では嵐の前の静けさといった感じで、新一郎や吉太郎、お輝や路子たちが診療の準備のために黙々と作業を続けている。

「ああ、路子さん。そこに書き置きした薬だが、あなたの父上に願って蓬莱屋から取り寄せてもらうように願います」

肝煎の新一郎が声を上げると、

「承知しました。そういえば蓬莱屋さんは高麗人参をいただきたいと取りに見えることになっております」

路子が器具や備品類の点検をしながら答えた。

薬種問屋に高麗人参を納める…とは変わっているが、屋敷内では春貞の時代から高麗人参の栽培に成功し、小石川養生所などへも安価で納めていたのだった。

もともと尾張徳川宗春が藩主就任前に屋敷を訪問したとき、八代将軍吉宗から下し置かれた高麗人参の一部を手土産代わりに春貞へ進呈したのがきっかけだった。

吉宗は輸入品の為高価な高麗人参の国産化に力を入れていたからであったが、屋敷の土が合ったのか近隣の医者たちからも注文が増えていた。

なお、野菜の人参はセリ科であり、高麗人参はウコギ科。したがって両者は近類種ではなく全く別の種である。

そのとき、

「肝煎り…ご一同、おはようございます」

と西脇与五郎が顔を見せた。

「おはようございます。

西脇さん、今日は往診の日でございましたな」

吉太郎が言うと、

「はい。午前中に五箇所を回ってみるつもりです先生…」

と笑顔を向けた。

「承知しました。諄いようですが診断書はお戻りになってからご提示くだされ。

あっ、そうそう…。日本橋界隈をお通りになるのでしたら蓬莱屋さんにこの注文の文をお渡し願えませぬか」
吉太郎が願うと、
「委細承知。かならず立ち寄ってみましょう」
与五郎は渡された文を懐に押し込んだ。
これまで向島診療所は一部義歯などの調整のためにいわゆる往診をすることがあっても一般診療はあくまで診療所に通ってもらうことを前提にしていた。その理由は簡単で、江戸の町々を歩き回るには人手がないからだった。
昨年、与五郎は医者姿に変装して北町奉行所同心の動向を探ろうとした過程で子供の怪我を診ることになった。
これまで医者になりたいと思ったことは度々あったものの、剣を捨てる覚悟ができずにいた。しかし実際に子供の治療をしたことから剣者であるがまま医術を志しても良いのではないかと気が付いたことで迷いが吹っ切れた与五郎だった。無論診療所を助けることは藤九郎の許しを得てのことだったが、道場で木刀を振るう際にも頭は医者の束髪のままだった。
お文は、

松平健太郎 20210323 hagaromo

「いつでも髷を結い直して差し上げますよ」
と言ってくれていたが面倒をかけることでもあり、かつ束髪のままで木刀を握ることに違和感を感じなくなっていた。
この日も薬籠を持ち従者として付き従ったのは勘介だった。
「勘介さんや、元十手持ちに医者の従者などやらせてすまんな…」
大川を重三の操る舟の上で与五郎がつぶやくと、
「何のことがありましょう。目明かしも医者の従者も共に人助けでございますからな。それに西脇さま…いや、先生とこうして組ませていただくのも随分と板につきましたからな」
と笑った。
「違えねえ…。俺もお前さんも偽医者と偽従者から始まりましたからな」
与五郎も声を上げて笑うと櫓を漕ぎながらの重三は首を傾げながら、
「お医師というのはそんなに楽しいんですかい」
と真顔で聞いたので与五郎と勘介は再び笑い合った。
与五郎らが最初に向かったのは日本橋の大店のひとつ小間物を扱う老舗「櫛本屋」の隠居喜多治が寝込んでいると聞いたからだ。喜多治もこれまでは足腰の痛

みを治療してもらうため向島診療所まで駕籠で通っていたがここのところ風邪をこじらせ出歩けなくなったという。
何度も診療所に通う内に、これまでかかりつけの町医者より信頼に値すると考えた喜多治は肝煎りの新一郎に何度も往診を願ってきたのだった。無論それは断わざるを得なかったものの与五郎が参加したことで試験的に往診を始めることになったのだ。
二人が勝手口から声をかけると手代が手際よく二人を奥座敷に案内した。
部屋に入ると中央に喜多治が横になっていたが、与五郎らの姿を認めて嬉々として起き上がろうとしたがそれは叶わなかった。
「おとっつあん、無理しちゃだめよ」
枕元に座していた年増が喜多治の背を支えて寝かせた。
「せ、先生。よく来てくださった」
喜多治は右手を差し出すと、
「思ったより元気そうで安堵しましたぞ。今日は往診初日なので一応問診から始めさせていただきますぞ」
与五郎が隣となった年増に会釈をしながら座り込むと喜多治は、

松平健九郎 20210323 hagaromo

「これは失礼いたしました。こいつは等子と言ってわしの末娘でしてな、目に入れても痛くない可愛い奴なんですが出戻りでしてなあ」
と紹介すると等子と呼ばれた女は、
「なに余計な事を…」
苦笑して顔を向け、あらためて与五郎に頭を下げたが整った顔立ちの美しい女だった。
ちなみにこの時代、二十歳を過ぎれば年増と呼ばれていた。
「向島診療所の西脇と申します…。
では、始めますぞ」
与五郎はそれだけ言うと喜多治の脈をとり、寝間着の合わせを開いてあばら骨が目立つ胸に耳を押し当てなどして診察を始めた。
「ふうむ。少し熱があるようですな。これでは少々体がしんどいでしょうな…」
与五郎は喜多治の口内を覗き、両眼を押し開いた後に、
「微熱のためにこれまでの痛風の痛みが増しているように思えますが、いつから風邪気味であることに気がつかれましたかな」
と問答を始めた。

松平慶九郎5 20210323 haggromo

勘介は奉書紙を束ねた書き付けに手際よく与五郎の問診と喜多治の訴えを書き綴っていた。
そのとき店頭らしきところで怒号が聞こえ、番頭が奥座敷まで走ってきた。
「どうした騒々しい」
喜多治が窘めると、
「大変です。やくざ者達がお嬢様を渡せと凄んでおりますので」
と青い顔で報告すると等子は怯えて壁際に身を寄せた。
「どうしたのだ…」
与五郎が訪ねると喜多治は二年ほど前に等子が持参金付きで嫁に行った大工の棟梁富太郎の息子が悪い仲間と付き合い始め、今回の縁談もどうやら持参金目当てだったことがわかった為、名主を中に入れて離縁させたのだという。しかし息子の裕之助は等子に未練があるらしくこれまでにも数度やくざ者を寄こして復縁を迫ってきたという。
「なるほど、詳しい話しは後だ。ご隠居、俺が出てみよう」
与五郎は勘介に目配せして奥座敷を出て行くと勘介もそれに従った。
店に出てみると喜多治の長男、現店主は殴られたらしくうずくまっており、六人

松平健九郎5 20210323 hagaromo

の見るからに悪そうな男たちが凄んでいた。
「将軍様のおられるこの江戸でばかな真似はやめよ」
そう言いながら与五郎は躊躇いもなく六人の前に出ると女衆の悲鳴が上がった。
「なんだてめえは…。どこの藪医者かは知らねえがお節介をすると怪我をするぜ」
髭面の男が腕まくりをして与五郎に掴みかかった刹那、
「うぎゃあ」
と悲鳴が上がり男は土間に叩きつけられていた。
「や、やりやがったな」
五人が一斉にドスを抜いたが、与五郎は顔色一つ変わらず、
「痛い目に合わないと懲りないと見えるな。
勘介さん、たたき出しましょうぞ」
と暖簾を押して表に出た。
引っ込みがつかなくなった五人はしゃにむに与五郎と勘介にドスを向けて突っ込んできたが、与五郎は医者姿であっても春江館で藤九郎に匹敵する凄腕の剣者だったし勘介もただの下僕ではなかった。なにしろ一昨年までは十手を預かる岡っ

引きであり、幾多の修羅場を潜ってきた男だった。また屋敷に奉公するようになってからは時間があれば道場で与五郎や新保金之助らの胸を借りていたから怯むはずもなかった。

与五郎も勘介も素手であっと言う間に五人を路上に叩きつけた。それでも何とか起き上がった五人は這々の体で逃げ去っていき、残ったのは与五郎にねじ伏せられた髭面の男だけだった。

与五郎に腕の骨を折られたために痛みに転げ回っていたが、それと気づいた勘介が先ほどの奥座敷から薬籠を取ってきた。

目配せした与五郎と勘介はにやりと笑い合ったが、等子はお店に通じる通路で顔を輝かしていた。

髭面の男の前に座り込んだ与五郎は痛がる腕を手ぬぐいで縛って固定し、首から下げるようにした。

処置が終わった後与五郎は顔をしかめている男に、

「よいか。どこのやくざ者かは知らぬが親分に申しておけ…。

俺は向島の松平藤九郎さまに使える者。もし文句があるならいつでも屋敷に出入りでも何でも良い、押しかけてこいとな」

と言うと男の体がピクッと動いた。
「ただしその際にはお前達の首は胴から離れておろうがのう…。
もしこれ以上この店や等子さんらに悪さをしたときには家臣団を引き連れ、お前達のねぐらを根こそぎ叩きつぶすとな。
わかったかっ」
と諭すように言い切った。そして、
「同じ事を裕之助とかいう馬鹿息子にも申し伝えよ。
我らは江戸の火消したちとも親しいし南北奉行所のお奉行とも懇意な武家だ。下手をすれば大工だろうが旗本だろうがこのお江戸にいられなくなるとな」
そう言葉をつないだ与五郎は放り出した匕首を男に返し、肩を貸して立たせた。
「腕は痛かろうが、歩けるだろうよ。
もし腕が気になるなら向島診療所に来い。いつでも診て進ぜようぞ」
にやりと笑うと男は震えながら逃げていった。
「勘介さんや、喜多治さんに薬を出して次へ回らんとな」
与五郎が再び奥座敷へと向かうと等子がすがりつくようについてきた…。
引き留めようとする喜多治に、

「七日後にまた来ますでな。薬はきちんと飲んでくだされよ。そうそう、また万一奴らが顔を見せた時には夜でも良い。誰か使いを寄こしてくれれば駆けつけますでな」
与五郎は医者の顔でそう言い切った。
店から出た二人は念のため廻りに注視したがやくざ者たちの姿はなかった。
「しかし、今更ですが旦那は強い…お強いですな」
勘介が感嘆の声を上げると、
「お前さんだって、大したものではないか」
と笑い合った。
その後なんとか四件の往診をこなし蓬莱屋に注文の文を渡した二人は予定より半時ほど遅れて屋敷に戻ったが、早速藤九郎に概要を報告し、後に新一郎に勘介がまとめてくれた診断書を提出しつつ今日の診断や治療についての報告を行った。
藤九郎は、
「ご苦労でした。またようやった…。問題を根深いものにしないよう、我らの名を出すのは良い作戦よなあ。ただし本当の馬鹿は何するか分からんから、注意を怠らぬようにな」

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

と与五郎たちを労った。

三

それから四日経った昼過ぎ、門前に駕籠が二挺止まり、中から頭に包帯を巻いた壮年と見られる商人風の男と路考茶の小袖に昼夜帯を粋に結び、かもめ髷を結った女が屋敷の開き門を見上げた。
藤九郎の屋敷は昼間は門を開けたままにしてあったから屋敷の奥がある程度見通せた。
「兄さま。これは…大層な御屋敷でございましたな。腰が引けてしまいます」
女が言うと、兄と呼ばれた男は、
「確かにな。お武家様の御屋敷とは聞き及んでおりましたが、これほどとは…。等子、戻りますかな」
と臆したか女を振り返ったが、

「いや、御屋敷に御用があるのではなく西脇先生に一言お礼をと思ったわけで、ひと目お顔を拝見しとうございます。お父様からの言づて物もございますからな」
等子は意を決した表情で開いた門戸を叩き、
「御免下さりませ」
と声を上げた。
急ぎ出てきたのは勘介だった。
「あっ、これはこれは櫛本屋の旦那さまとお嬢さまではございませんか。お尋ねくださいましたのか…」
愛想良く対応し二人を客間に通した後に道場にいた藤九郎と与五郎に知らせにいった。
「なにっ、先日の礼だとな。
御館さま。困りましたな、いかがいたしましょうや…」
与五郎は些か困惑した表情で藤九郎に問うと、
「よいではないか。せっかく大川を渡られてきたんだ。またお前の往診先でもあるし、茶の一杯もさしあげたらどうかな」

と与五郎の肩を押した。
与五郎は稽古着のままでは失礼かと着流しに着替えたが、髷はここのところ束髪のままだった。
客間に入ると挨拶もそこそこに…。
「嗚呼、西脇先生。その節はありがとうございました」
と等子は与五郎に抱きつかんばかりに近づき、両手を正座した与五郎の両膝に触れながら深々と頭を下げた。
「な、な、なんということもございませぬ。しかしお怪我がなくてなによりでした」
与五郎がたじろいたとき、お染めが茶と茶菓子を運んできた。
「いらっしゃいませ。ごゆっくりどうぞ…」
そう言いながらも与五郎に笑顔を向けて目配せすると柄にも無く与五郎が照れた。等子は両手を与五郎の膝に置いたままだったし、お染めから見て、もし自分や兄が同席でなかったら抱きついていたのではないかとさえ思ったからだ。それだけ等子は情熱的な女だった。
「等子。西脇先生がお困りだ。少し離れなさい。

あ、ご挨拶が遅れましたが、手前は櫛本屋の当主益太郎と申します。等子の兄でございますが、先日は父の診察においでいただきましたのにあんなことがありご挨拶ができませなんだ。
お詫び申し上げます」
等子の兄にしてはかなり歳が離れている兄弟のようだったが如才の無い男のようだった。
「これは形ばかりの品でございますが、手前どもの取引先である京の仲間が贈ってきた京菓子でございますのでお口汚しにご賞味くださいませ」
と頭を下げた。
「これはお気遣いいただき恐れ入ります」
与五郎も軽く頭を下げた。
眼前に置かれた湯飲みに手を伸ばしながら益太郎は、内輪のことではございますが…と断りながら自己紹介のつもりでもあったのか、お店と等子のことを話し出した。
それによれば兄弟は五人いたが益太郎は長男、等子は一番下で長女だという。次男から四男までが早くに亡くなったこともあったから必然的にお店は益太郎が継

ぐことになったという。
等子は末っ子で一人娘、父喜多治が溺愛したこともあり何不自由なく自由奔放な娘として育った。
「気がつくと…親父の責任でもありますが婚期を逃し年増になってしまいましてな」
益太郎は等子を愛しそうに眺めながら呟いたが当の等子は気にしていない様子だった。
二年ほど前、名主を通し大工の棟梁の息子と縁談をという話しが舞い込んだとき、さすがに父喜多治はよい機会と判断して話しを進めてもらったものの、いざ婚礼が済んで半年も過ぎたとき、夫の女遊びや博打場への出入りが目立つようになったという。
どうやら等子の持参金目当てもあって仕組んだ縁談だと分かった喜多治は名主を通して娘を取り戻すことに成功し、嫁ぎ先とは縁が切れたものの顔を潰されたと元夫は復縁を迫り、度々嫌がらせが続いていたという。
「しかし西脇先生。過日先生が中に入っていただけたお陰で一昨日名主と棟梁が正式に謝罪に来られましてございます。

名主曰く向島の松平の殿さまに睨まれたら江戸にはいられなくなると青い顔でございまして、やくざたちからも二度と悪さをしないとの血判を取ったとのことでした」
益太郎が話している間、等子はじっと与五郎の顔を見上げたままだ。
「父がまた往診してくださったときにあらためてお礼をと言いますとこの等子は数日も経ってからでは失礼だ、すぐにお目にかかりたいとそれはもう熱心でございましてな…」
そのとき、
「失礼いたす」
と藤九郎が姿を見せた。
「お、御館さま…。
こ、こちらが往診先、櫛本屋の当主益太郎さんと妹の等子さんです。
益太郎さん、こちらが我が屋敷の当主松平藤九郎さまでございます」
慌て気味に与五郎が紹介すると益太郎は怖いものでも見たかのように這いつくばったが、等子の素振りは藤九郎に会釈をしたもののまだ与五郎を見つめていた。
それでも四半時も過ぎた頃に等子は、

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

「先生、明明後日…必ずお顔を見せてくださいまし」
と名残惜しそうに振り返りながら益太郎に袖を引かれつつ背を向けた。
「ふうっ。それにしても御館さま。お姿をお見せいただきましたので助かりました」
と頭を下げた与五郎に藤九郎は、
「いやな、茶を運んだお染さんが『西脇先生がお困りのご様子』とふれ回っておったのでな、無粋な役だが助け船にきたのじゃ」
と声を出して笑うと、
「いやはや、どうなることかと…それがし女子には縁もございませんでしたから苦手です…」
与五郎が頭に手をやりながら照れると、
「うむ、これはしたり。与五郎の弱点を知ったわ」
藤九郎が嬉しそうに笑った。
それから三日後、西脇与五郎と勘介は再び櫛本屋を訪れた。
「医者がこんなことを言っては叱られるが、なんだか気後れしてのう」
与五郎が日本橋を渡りながら呟くと、

松平健九郎5 20210323 hagaromo

「まあ、お叱りを承知で申せばあの等子さん、先生に一目惚れってやつですぜ」
勘介は冷やかすでもなく真顔で言い切った。
「でもな勘介さん。それがし…いや、わたしはすでに六四の爺だぞ。聞けば
あの娘は出戻りとはいえ三十二歳、これはいかん…いかんぞ」
与五郎は立ち止まって頭を振った。
「先生、若造が生意気なことを申しますが、年の差をお考えなことは先生も等子
さんをまんざら憎くは思っておられない証拠ですぜ。
それに世間では旦那と女房の年の差が倍だなんて例はいくらでもありまさあ。
まだ独り身の若造が申し上げる事ではございませんが、先生も剣術だけでなく医
学をも極めようとなされている。
いま少し肩のお力を抜き、世間並みの喜びといったものを味わわれるのも宜しい
のじゃあございませぬか。
昨年、新保さまとお園さまが夫婦となりました。ご家臣団では先生が唯一の独身
者でもありますからな」
「ふむ。確かに俺は…私はこれまで剣一筋の世間知らずだったからのう」
与五郎は嫌な顔も見せず勘介に笑顔を向けた。

「それに世辞ではなく、等子さんは少々ぬるま湯の中でお育ちになったからか物に動ぜずご自分の思いに忠実なんでございましょうな。
世間ではそういう女は慎みがないとか言いますが、育ちが良いだけで悪気がある わけではございませんし、なによりもお綺麗な方ではございませんか」
櫛本屋はすでに目の前に迫っていた。
二人が店先に目をやると、何としたことか等子が暖簾を肩にかけ、嬉しそうに手を振っているではないか。
「先生、ご隠居さまのお見立てを間違ってはなりませんぜ」
勘介が与五郎の背を軽く叩くと与五郎は子供みたいにコクンと頷いた。
その日の夕餉の席に与五郎は皆の質問攻めにあった。
「おいおい、そうそう皆で与五郎を虐めてはならぬ」
藤九郎が苦笑いしながらそう言いつつ、
「で、どんな具合であった…」
と問うと隣のお蘭に窘められた。
その日、診察もそこそこに与五郎の隣にぴたりと体を寄せて座った等子は、
「先生。爺様のお相手ばかりせず、この等子と中村座にご一緒してくださいませ

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

な」
与五郎の手を握り、振りながら哀願するさまは同席の勘介曰く、
「あっしも男女の修羅場は多々見てきましたがな、あれは見ちゃあいられませんでしたな」
と茶化した。
与五郎はと言えば上気した表情だったが、どこか嬉しそうだった。
「中村座というのは芝居小屋か。わたしは…入ったことがないから当然歌舞伎たるもの見たこともないからのう」
与五郎が答えると、
「なら、先生何ごとも経験と申します。今度は勘三郎だけでなく四年前に襲名したばかりの七代目、市川團十郎が舞台に上がると申します。
ねえ、ご一緒してくださいな」
等子は哀願しながら与五郎にしがみついたが、横で寝ている隠居の喜多治はただただ嬉しそうににこにこしているだけだったという。

松平藤九郎5_20210323 hagoromo

第二章　徳川斉朝の来訪

一

大川の川縁に桜が咲き始めた頃、急に西脇与五郎と等子の縁談話が具体化した。出会ってからまだ二ヶ月ばかりしか経っていなかったが、大きなきっかけは与五郎が往診で通っていた等子の父、喜多治の容体が思わしくなかったが、三月中旬にいきなりその病身の喜多治が越後屋の主人三井高清に連れられて藤九郎を訪ねたことだった。

すでに藤九郎とは深い信頼関係を築いていた高清だったが、

「いきなりのおとない、お詫び申し上げます。

こちらが松平藤九郎さまでございますよ喜多治さん。

殿さま。こちらが櫛本屋の隠居喜多治さんでございます」

と両手を突いた後、

「今日は折り入ってお頼みしたいことがございましてな」
と一膝前に進めた。
「ふむ、喜多治さんとやらがご一緒であれば御用の向きはひとつしかありませんかな」
藤九郎が笑顔で応じ、
「まずは喜多治さん。お体がお悪いことは西脇より聞いております故、どうぞ足を投げ出してくだされ」
平伏していた喜多治は恐る恐る顔を上げ、ちょうど勘介が運んできた座椅子に沈み込むように座った。
とにかく藤九郎の評判は主に江戸の分限者…三井高清を代表とする商人たちから江戸中に知れ渡ったと言える。
ざっくばらんで懐が深い男。
将軍徳川家斉や尾張藩主らが訪れる屋敷の当主。
南北両町奉行と昵懇だということ。
なにより江戸広しといえども剣を持たせたら鬼神に迫る強さだという男を前にして喜多治は震えていた。

松平慶九郎5 20210323 hagoromo

「殿さま。お節介でご一緒させていただきましたが喜多治さんは緊張して上手くお話しが出来ぬようですから、僭越ながら手前からお話しさせていただきます」
高清はそう前置きして話しを始めた。
「ご承知のように喜多治さんの一人娘等子さんはこちらの西脇与五郎さまにぞっこんとか…。
ここの所、日々上の空で西脇さまのことばかりお話しするのだそうです」
「……」
「聞けば西脇さまは独身とか…。
そして昨今ではありがたいことに西脇さまも等子さんのことを心憎くいほど親身にお世話をされているようでございます。
どうか、殿さま。この縁、結んではいただけないでしょうか。
それに…」
「それに…」
「はい。西脇先生のお見立てでは喜多治さんは肺の臓がお悪く、一年ほどのご寿命と診断されております故、喜多治さんの目の黒いうちに最愛の等子さんが真に幸せになってくれるところを…ところを、見せてやりとうございます」

三井高清は涙ぐんでいた。
「商いは違えど日本橋でお店を出し、誠実なご商売をされている櫛本屋さんでございます。なにとぞ…」
高清が再び頭を下げると頭を下げたままの喜多治は、
「殿さま。ご承知のような事情を持った至らぬ娘ですが、もし御屋敷に合わぬとのご判断でしたら大川に沈めてもらっても結構です。身勝手なお願いでございますが何卒、等子の願いを叶えてやってはいただけませんか」
そのとき、
「遅くなりました」
と静香が茶を運んできた。
「これは静香さま御自ら恐れ入ります」
静香のことをよく見知っている高清は涙を拭いながら頭を下げると、
「高清さまもご健勝の良し、うれしゅうございます」
静香が応じると藤九郎は、
「静香どの。お座りになって一緒に話しをお聞きくだされ」

と願った。
喜多治は藤九郎が丁寧な物言いをする女性だからして偉い方なのだろうとおずおずと顔を上げた瞬間、凍り付いたように動かなくなった。
「ど、どうされた喜多治さん」
高清が心配して声をかけると、
「こ、これは…。大変ご無礼ながら、貴方さまは十年前に亡くなりました女房、等子の母に生き写しでございましたので…。嗚呼」
放心状態の喜多治をそのままに藤九郎はこれまでの話しを静香に話し終えた。
「西脇さまにご異存がなければ良いお話しではございませぬか、御館さま」
静香は老いても美しい顔に笑みを浮かべた。
「ただひとつ、喜多治さんが懸念されていることがございます。というより西脇様もきっと同じ思いで躊躇されているのではないかと存じます」
三井高清が再び口を開いた。
「懸念ですと…。しかし年の差などは本人たち次第。またお嬢様が再婚で西脇が初婚ということもこれまた本人次第でござる。ご懸念には及びませんぞ」
藤九郎は静香と顔を見合わせ、頷き合って応じると高清は、

「いえ、そういうことではございませぬ。
あの天真爛漫な御気性の等子さんが当御屋敷の家風に合わないのではないかということでございますよ殿さま。
本人には悪気はまったくございませんが、嬉しいと思えばその感情をそのまま表に出すお方。
西脇さまと二人っきりの場合はそれでも宜しいでしょうがな、ご一同様に失礼な振る舞いをと…ご不快な思いをされるのであれば大変なご迷惑をおかけすることになります」
三井高清が真顔で言い切った。
「ふうむ。確かに我らは一丸となって各の勤めを果たさなければならぬ。西脇はすでにご承知かと思うが、凄腕の剣客であると同時に向こうにある向島診療所の医師として世の中の役に立とうと努力しておる。
しかしな、もともと我らに家風などというものはないし堅苦しいことはそれがし自身が苦手…。
ただただ皆と仲良くやってくれればそれで良いがのう」
藤九郎が呟くと静香は、

「さようでございますな。とはいえこれまでお育ちになった環境とはいささか違うのも事実ですが、これは聴く耳を持っていただけるのなら日々お教えすれば良きこと。
それにこのお御屋敷には武家出の女衆だけでなく町屋や農家で育った女衆もおりまする。等子さまがお屋敷においてどのようなお役目を担われるかは御館さまの命によりますが、私や他の女衆も皆親身にお教えできると思いますよ」
と言い切った。
一方、井戸端で一休みしていたお文やお染、おたみ、田次郎、又八、重三らはいま客間でどのような話しになっているかが気になるのかその話題で持ちきりだった。
「西脇先生はいま診療所かい」
「はい。今日は患者さんが多いので一日中診察部屋に詰めると申されておりました」
お文の問いにおたみが答えたが、
「お染めさんは等子さまとやらがいらしたときに茶をお出ししにお顔を見ているんだよね。どんな感じのお方かい」

お文が興味津々で問うた。
「まあ、お茶を運んだだけだからそうじっと観察したわけではないけど、あれは根っからのお嬢様だね」
お染が即答した。
「へえ…。でもさ、お嬢様は日本橋当たりには沢山いるよ。どんな女の人なのかい」
「そうだねえ。お綺麗なお方ですよ。たださ、もう西脇先生の両膝に手を置いてすがりつかんばかりなんだよ。こっちが照れてしまいますよ。
しかし、それは好きな男を物にしようとする手練手管ではなくてさ、本当に西脇先生が好きなんだよ。だからこっちも嫌な感じは受けなかったよお文さん」
お染めが答えると田次郎は、
「それで肝心の旦那はどうなんだい」
とお染に迫った。
ここに勘介さんがいなさったらもっと詳しい話しが聞けるんだけどいま殿さまのお使いで出ているしね…。でもさあ、西脇先生も当初はお顔を赤くなさっていたけど満更でもなさそうだったよ」

お染が言い切った。
しばし考えていたお文は、
「西脇先生はさ、もともと真面目なお方だし剣の腕は凄いらしいけど女の扱いには疎いお方だよ。
ご自分から積極的に女に声をかけるとか女を踏み台にして出世をといったことには無縁なお方だよね。だからさ、あたしが言いたいのは等子さんの積極的な性格は西脇先生には嬉しいんだと思うよ。
あのお方はご自分から女の手を握りにいけるお人ではないからさ、等子さんから身を寄せてくれるのは絶対嬉しいと思うよ。
やはりこれは似合いの夫婦だよ」
お文が母屋の方を見つめながらそう言い切った。
その母屋の客室では…
「俺の考えというか思いは西脇が幸せになってくれればそれでよい。これまで剣一筋に過酷な時代を過ごしてきた西脇だが、不思議に世俗の垢には染まっていない奴よ。だから本人が等子さんと夫婦になりたいと申すなら喜んで手伝おうぞ。でな、まだ時間はあるだろう故等子さんをこの屋敷に遊びに来させるとよいので

はないかな。
俺たちの屋敷内の様子をあらかじめ知っておいてもらうのも良いと思うぞ」
藤九郎が答えた。
「あ、ありがとうございます」
三井高清が安堵した体で喜多治共々深々と頭を下げた。
「ではな、西脇本人の思いもよく聞き、双方依存がなければ今年中に式を挙げようかのう」
藤九郎が静香と頷き合うと高清は、
「その切は婚礼衣装、是非当店にお任せくださいますように」
としれっと締めくくった。
「それにしても静香さま。あなた様には大変失礼な物言いでございますが、女房に生き写し…」
喜多治は何度も振り返りながら三井高清の手配した駕籠で帰って行った。
二人を門前まで見送った藤九郎と静香だったが、
「世の中には自分とそっくりな人間が三人いると聞いたことがありますが、妙な気持ちでございますな」

松平藤九郎5 20210423 hagoromo

静香は当惑した顔で呟いた。

二

その二日後、門前が人馬で賑わったと思ったら、徳川斉朝と附家老成瀬正典がやってきた。
早速客間に通された二人は案内した勘介が勧めるままに上座に座した。
暫くして藤九郎が普段着の着流しで顔をみせ、
「斉朝さま。狭い館にわざわざお越しいただき恐悦至極に存じます。それがしが松平藤九郎でござる」
と頭を下げたが平伏はしなかった。続いて静香と井之上新界が同席するために座した頃、茶と茶菓子が運ばれてきた。
「藤九郎どの。お初にお目にかかる…。
文をお出ししたものの急なおとない、許されよ。先ほど参勤のご挨拶のため上様

にお目にかかりましたが、なるべく早めに向島に行けとのお言葉をいただきましたのでな、その足でお邪魔した次第…」
「成瀬さま。お気遣いはご無用に願います。我らはご覧の通りの無位無冠のいわば浪人者。天下の御三家筆頭格の尾張様に気を使われる存在ではございませぬのでな」
藤九郎は初対面の斉朝はもとより成瀬正典に臆せずに答えた。
「藤九郎。お主は尾張とこれまで深い仲…というより古老たちに聞けば義父天祥院さまが大変世話になったと聞く。縁はいかようなものだったのか聞かせてくれ」
少年の好奇心からだろうか斉朝が問うた。
天祥院とは徳川宗睦の法名である。
「はい。そもそも当屋敷の初代当主松平春貞は尾張三代藩主徳川綱誠さまの実子でございましたが訳あって松平性に預けおかれて育ったとのことでございます。したがいまして尾張第六代藩主徳川継友さま、第七代藩主徳川宗春さまはご兄弟と相成ります」
藤九郎は茶をひと飲みして続けた。

「春貞は市井の者として生きることを決心いたしましたが、失礼ながら尾張藩の内情がそれを許さず幾多の行き来があり、僭越ながら春貞がその都度尾張の危機を救われたと伝わっております。その縁でそれがしは先の宗睦さまには大変可愛がっていただきました。

ちなみにそれがしの妻がただ一人春貞の孫として血縁者でございます」

藤九郎が簡単に説明すると斉朝は頷きながら顔を輝かした。

「なるほど…。お若い斉朝さまが藩主ご就任となり、あれやこれやで時間が取られ、ご挨拶が遅れましたが生前天祥院さまからも必ず藤九郎どのを訪ねよとのお言葉がございました…」

成瀬正典は茶で喉を潤し、

「斉朝の殿は一橋治国様のご長男であらせられますので巷のうるさ方は、尾張は徳川義直以来の男系の血筋は断絶したと嘆かれます。しかし、斉朝様の御実母は二条治孝様の御娘・乗蓮院様であり、治孝様の父君・二条宗基様の御実母は尾張藩四代藩主徳川吉通様のご長女信受院（三千君）様です。つまり斉朝の殿は吉通様の来孫（曾孫の孫）でございまして、恐れながら尾張徳川家の血を女系で引いていることになり申す。

そうした意味においては藤九郎どのの御屋敷もご妻女までは女系でございますな。どこか親しみを感じます」
成瀬正典は初めて笑顔を浮かべた。
成瀬正典は尾張藩の附家老であると共に、尾張犬山藩の第六代当主でもあった。
「成瀬さま。それはかいかぶりでございます…。
我らはご覧のとおりの少人数でその日その日を上様の御蔭を持ちまして何とか無事に過ごしているだけでございます。
とてもとても御三家筆頭の貴藩と比べられるものではございませぬ」
藤九郎が言うと、
「いや、このタヌキ爺が申すのも変ですがな、上様からお聞きしたところご家族を含め総勢二十数名だとのこと…。それでいざ鎌倉となれば上様のお命をお守りし厚い信頼を勝ち得ておられる。
ここだけの話しじゃが藤九郎どの…。幕閣の中にはお主のことを影の老中などと申す者もおるそうじゃ。諄いようじゃがこの少人数でよく戦えるものと皆首を傾げておる」
成瀬正典が真顔で言い切った。

松平藤九郎 20210323 hagaromo

どうやら成瀬正典は藤九郎らの実力を見分しに来たのかも知れないと思い、背後に座していた静香に目配せし、隣に座らせた。

「諄いようですが我らは正確に申せばこの土地の所有を認められてはおりますが幕府からの禄を食んではおりませぬ。したがって普段は登城するでもなく特別な政務に勤しむこともございません。したがって上様はもとより幕閣の方々に対しても求められなければ意見を申し上げる機会もございませぬので何の力もございません故、影の…というお話しは世間が面白可笑しく言いふらせたことでございましょうな」

「なんと…」

「それでも世を乱す者に対しては毅然と戦うつもりですし、万一上様に危惧がおありであれば我ら全力でお力になるべく勤めて参りました。

ただし成瀬さまには釈迦に説法なれど戦いは数ではございませぬ」

「ふうむ」

「斉朝さま、成瀬さま。この者は我が屋敷の奥向きを預かる者にて春貞の時代から我が家に使えてくれております重臣でございます。

この女性、その昔には公儀隠密から忍びの術を託された者にていざとなれば失礼

松平藤九郎5_20210323.hagoromo

ながら武家の二十人や三十人はあっというまに倒してしまう腕をもっております」

「……」

「それだけではなく、そうですな…これは大風呂敷ではありませんしお怒りを承知で申せば、いま門前あるいは門内に待機されている尾張様の百騎と戦っても尾張様に勝ち目はございませぬ」

藤九郎が微笑を浮かべながら言うと成瀬の顔色が変わった。

それに気づかぬ体で藤九郎が、

「言葉で申してもそれがしの申したことは絵空事と思われるでしょうが、御家老ご自身で我らの力の一端をお試しいただきとうございます…。

いま、お手前の眼前に茶器がございますな」

「い、いかにも」

「失礼ながらその茶器をお手に取っていただけませぬか」

藤九郎が言うと、

「何のことがありましょうや」

成瀬はそう呟いて右手を差し出した刹那、静香の右腕も上がった…。

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

「うっ。こ、これはなんとしたことか…。て、手が動かぬ」
「どうした成瀬」
斉朝が心配して声をかけたが、成瀬はなにが起こったのかが分からず呆然自失していた。
「手が、茶を取れないのです殿…」
成瀬が悲鳴に近い声を上げた。
「馬鹿を申せ。目の前にあるではないか…」
斉朝が苛ついてその茶器に手を伸ばした刹那、静香の左手が上がった。
「おおっ。な、何ごとぞ。余は茶碗一つ取れなくなったのか」
驚愕の二人だったが静香がすうっと両手を下げると「嗚呼」と声が上がって、
「殿、茶碗が掴めましたぞ」
成瀬が喜んだとき、　今度は静香が両手の掌を組んだ。
「うわわわわわっ」
尾張藩附家老が悲鳴を上げると茶碗を持ったまま、座したままの体が五寸ほども静かに空へと浮いた…。
成瀬をそのままに藤九郎は斉朝に、

「この異能の前では刀も槍も役に立ちませぬし相手の手足は勿論、首をねじり切り命を絶つことさえ可能です。そしてまだ幸いにそうした例はございませぬが相手は一人二人でなく百人でも二百人でも吹っ飛ばす力を持っております」
藤九郎はそう言いつつ静香に頷くと静香の印が解かれ、成瀬の体は音もなくすうっと下がって行った。
まだ青くなっている二人に藤九郎は、
「ただしこの技はある意味で秘術。公開しているわけでもなく、わざわざ御御足を運んでくださいました尾張様にお見せしたまでにございますし実は上様もまだご存じではありませぬ。
無論、通常の戦いは剣や槍で行いますがこちらも悪意を持って立ち向かってくる敵に対して我々は容赦はいたしませぬ」
と平然と話したが斉朝と成瀬はようやく顔に血の気が戻ってきた。
「藤九郎。余は若く経験もない。藩主を継いでから少しでもこれまで先達が努力してきたことを知ろうと古老はもとより義父の書付などに目を通しているが、ここ…向島の話が意外に多いのだ。
それらは断片的で肝心なところがいまひとつ分からない話ばかりだが、いま義父

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

たちが何故お主たちを大切にしてきたのかが分かった思いぞ」
徳川斉朝が顔を輝かせて言った。
「有り難き幸せ。我らも出来ることなら尾張様とのご縁をこれからも慈しんでいきたいと存じます」
藤九郎と静香、新一郎は初めて平伏すると成瀬は、
「頼りにしておりますぞ、藤九郎どの。
これからも是非よろしゅうに…」
と頭を下げた。

徳川斉朝の行列を見送った藤九郎、新界、静香だったが、
「御館さま。また随分と脅かしましたな」
新界が笑った。
「いささかやり過ぎたかのう…。
しかし前にも申したとおり、現在の尾張と我らは関わり合いが無くなっている。
上様の言があったにせよ無位無冠の我らを訪問なさった意図はなんだったのか…。

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

まあ、静香どのおかげであの程度驚かせておけば無理難題は持ち込まぬだろうよ」

三人は肩を並べて母屋へ向かった。

三

その頃、西脇与五郎は藤九郎と診療所の新一郎の許しを得、等子と日本橋を歩いていた。堺町（日本橋人形町）の中村座を観た後に向島に等子を同道しようという道すがらだった。

「先生。いかがでございましたか勘三郎は」

道行く人々の視線などには一向に臆すること無く与五郎の左腕にぶら下がるようにして歩く等子は目立った。

「歌舞伎を観るのは初めてだからな、正直何が何だか分かりませなんだ。ただ幕間の弁当は美味かったな…」

松平健太郎 20210323 hagoromo

与五郎も笑顔を介したとき、
「おい、真っ昼間から見せつけてくれるじゃあねえか。
俺たちにも少しはいい目を見せてくれねえかねえ…」
あわよくば酒手でも当てにしたのか見るからに荒くれ者の男たちが三人、与五郎たちの前に立ちはだかった。
今日の与五郎は着流しに束髪、腰には脇差しのみがあったが、温和な表情でもあったから武家と言うより芸事の師匠に見えたのかも知れない。対して等子は芝居見物だというので大柄の小袖に帯を粋に締めていたからこれまた商家の女とは思えなかった。
「お兄さんたち、わたしの旦那は強いから喧嘩を売るのはお止めになったほうがよろしいですよ」
と臆する様子も無く言い放ったのが男たちの勘に障ったか、
「狐の丈太朗さまも随分と舐められたもんよ…。
やっちまえ」
懐に忍ばせていた脇差しを一斉に抜いたものだから、道行く人たちから悲鳴があがった。

松平藤九郎5 20210323 hagaromo

勿論与五郎が遅れを取るはずもなく、等子を背に庇ったまま、脇差しを抜くでも無く左右に揺れるように動くと三人の悲鳴が上がった。
「こんな調子で町の衆に悪さを働いているんだろうが、止めねえと命を落とすぜ」
与五郎は倒れた男二人を足で道の端へと転がしながら声をかけた男の右肩肘関節を外した。
「ぎゃあああ」
匕首を落とした男は、
「た、た、助けてくれっ」
と声を上げた。
「助けてあげない訳でもねえが、二度と日本橋界隈をいい気になって歩き回るんじゃあねえぜ」
与五郎が静かに言うと背に体を寄せた等子が芝居の影響か手を叩き、
「よっ、先生！」
と声を上げたので廻りに笑顔が戻った。
「ではな…よしっ」

松平慶九郎5 20210323 hagoromo

与五郎が男の肩を押さえると悲鳴を上げたものの関節が元に戻ったことを悟ったか、
「すまねえ…」
と痛そうにしながらも頭を下げた。
与五郎は、
「俺は向島診療所の医師だ。仲間の手足が痛んだらおいで…。診てやるからな」
と懐から一朱を出し、
「これは手当代だ。二度と馬鹿な真似は止めることだ。でないと今度は首の骨が折れる」
そう言いながら男に握らせた。
這々の体で逃げていく三人を等子は、
「先生、甘いなあ」
というと、
「なあに、今日は等子さんと一緒だ。いいとこ見せたくてな」
与五郎精一杯の惚気であった。
親子のような二人はまた寄り添って大川を渡るべく竹屋の渡しに向かった。

屋敷の門前に着いた二人だったが等子は、
「二度目でございますが、大きな御屋敷ですね」
とさすがに少し腰が引けていたが与五郎に、
「今日は藤九郎さまと奥方さまにご挨拶しなければならないのでな。さあ入ってくだされ」
と背を押した。
客間で待たされた二人だったが与五郎の方が緊張していた。
しばらくすると藤九郎とお蘭そして静香とお文が入って来て藤九郎とお蘭が上座に座るとその両脇に静香とお文が座した。
さすがの等子も自然に平伏していたが、
「等子さん、よう見えられた。お手をお上げくだされ」
と等子は藤九郎の声で恐る恐る顔を上げて藤九郎とお蘭を確認し、再び頭を下げた。苦笑いしながら与五郎は、
「等子さん、御館さまと奥方さまです」
と言うと、
「始めてお目にかかります。櫛本屋の出戻り、等子と申します」

松平慶九郎5 20210323 haggromo

悪びれることも無く言うとお文が声を上げて笑い出した。
静香も含み笑いしながら、
「楽しいお方でございますな」
と呟くと等子はその静香の声に反応し顔を向けた。
突然、
「嗚呼、ああ、お母さまだ…母さまだ」
等子は悲鳴のような声を上げ、静香の面前まですり寄って静香を見上げた。
静香は等子の父親、隠居の喜多治から同じ事を言われたので平然としていたが、
等子は驚喜の体で静香の膝にしがみついている。
「等子さん。静香どのは母君では無い。今少し離れなされ」
見るにみかねた与五郎が苦笑しながらも言葉をかけると両手は静香から離したものの顔は仰ぎ見たままだ。
静香は藤九郎らに目配せした後、自ら進み出て両手を等子の両肩に置いた。
「等子さん。あなたはさぞや母君がお好きだったのですね」
と語りかけると涙を流しながらの等子は「はい」と答えた後、
「十年前に流行病で亡くなりました。我が家では一番元気な母で、もともと武家

の出だと聞きましたがいつも背筋が伸びわたしから見ても綺麗な憧れの母様でした」
「あらあら大変な顔合わせになったけど、あたしは等子さん、好きですよ西脇さま」
お文が言うとお蘭が初めて口を開いた。
「等子さん。あなたは与五郎と所帯を持ちたいのですね」
と優しく語りかけると涙が溢れた目でお蘭に体を向け、
「はい。皆からは変わった女、何を考えているか分からぬ女と言われますが、母様と西脇先生はわたしを慈しんでくれます。
我が儘放題で育った女故、ご迷惑をおかけすると思いますが是非西脇先生と夫婦になり添え遂げたいと思います」
と両手をついた。
「分かりました。ここには女衆もおりますが、貴方を邪慳にする者など一人もおりませんから安心なさい。
それに…この御屋敷で西脇先生とお暮らしなら、母様もいつもご一緒ですよ」
お蘭がそういうと等子の顔が輝いた。

松平慶九郎5 20210423 hagoromo

その後等子は西脇与五郎に連れられ、屋敷内を案内するため客間を離れた。

四半時後、持ち場に戻ったお文はお染やおたみらの質問攻めにあった。

井戸端での洗濯の時間だったが、お文は手を休ませず、

「正直、かなり変わったお人だけどあたしは好きですよ。

お嬢様育ちだから世間知らずのところもあるけどさ…」

と言うと、

「ふうん。しかし西脇先生もまた変わったお人を見初めたものだねえ」

おたみが呟いた。

「でもさ、これはあたしの爺様の口癖だったけど、人が購ったものと貫った女房は誉めろ…ということさ。

悪口や批判からは何も生まれないからね。

それはそうと、承知のように等子さまの母様が静香さまに生き写しだというし、

声までそっくりだと等子さまは泣いていたよ。するとさ、奥方様がいいこと言われたよ…」

「ほう」

「西脇先生とここで一緒に暮らせばお母様もいつも一緒だと…」
「なるほどねぇ、さすがに奥方さまだ。それで等子さまはなんと…」
「終始うれし泣きでしたよ」
「しかし、世の中には他人のそら似ってあるんだねぇ」
「肝心の静香さまは嫌がってらっしゃらなかったのかい」
「静香さまはお心のお広いお方だからねぇ。終始笑顔でなんだか嬉しそうでしたよ。ほら、噂をすればなんとやら。お二人がこちらに歩いてくるよ」
お文たちは一時手を休め、与五郎と等子を笑顔で向かえた。

四

翌日西脇与五郎は藤九郎の部屋に呼ばれたが他には誰もいなかった。
「お呼びでございますか」
与五郎の問いに、

「入ってくだされ」
の返事がかかった。
一礼して藤九郎の前に座した与五郎は些か緊張していたが、顔を上げると藤九郎が微笑んでいるので安堵した。
「与五郎…。他でもない、等子さんとのことだがまだお主の思いを聞いておらぬのでな、今日は二人だけで話し合ってみたいと思ったのじゃ」
「ははっ」
「早速じゃが、等子さんとの仕儀、進めてよろしいのじゃな」
藤九郎が静かに語りかけると与五郎は平伏しながら、
「なにかとご迷惑をおかけいたしますができれば宜しくお願いいたします」
と返答した。
「うむ。承知した。
ただな与五郎、迷惑などと誰も思ってはおらぬ。ただただお主が幸せになってくれれば皆嬉しいのだ」
藤九郎の言に与五郎は、嗚咽するように口を開いた。
「これまでそれがしは所帯を持つなど考えたこともありませなんだ。

こんな思いは初めてですが御館さま…。等子さんと一緒にいるとなにやらこれまでの自分が半身で生きてきたようにも思え、後の半身を得たように思えます」
と項垂れた。
「与五郎、申すではないか…。それで良いのだ。
この世に男と女がいるのはそうした意味合いなのかも知れぬぞ」
「はい。これもそれも御館さまのおかげにございます」
「ではな、喜多治さんの容体も心配じゃ。異存が無ければなるべく早めに挙式を執り行おうではないか。よいな…」
「ありがとうございます」
「ではな、済まぬが兵庫をここに呼んでくれ」
ということで西脇与五郎は部屋を出て行くとすぐに岸部兵庫がやってきた。
「おお、ここへ座ってくれ。
早速じゃが与五郎と等子さんの婚礼の日取りをな早々に決めたい。承知のように等子さんの父親の具合が悪いのでな、早く花嫁衣装を見せてやりたいとの二人の意志なのだ…。
そうそう、花嫁衣装といえば恒例となったが越後屋の高清さんに事情を話して正

式に頼んでくれ」
「承知いたしました」
「ということは、仲人は俺たち夫婦となろうが、与五郎の親代わりとなるとやはり新界先生と静香どのにお頼みするしかあるまいな」
藤九郎は自身に言い聞かせるように呟くと、
「後、申すまでも無いが、披露にお呼びする方々の名を考えてみてくれ」
と兵庫に命じた。
「そういえば、勘介が寝込んでいると聞いたが様子はどうだ…」
藤九郎が問うた。
勘介がどういうわけか一昨日より熱を出し寝ているという。
「はい。新一郎先生はただの風邪だとおっしゃられていますしお若いですから大事はないと思います。
本人は立ち働けると申しておりますが診療所の合間を見て路子が薬を届けがしら様子を見ているようです」
路子は兵庫の実の娘だ。
「そうか、ここのところ奴には動きっぱなしのお役ばかりだったから疲れが出た

松平慶九郎5 20210323 hagoromo

のかも知れぬ。なにも心配せずまずは養生せよと伝えてくれ」
藤九郎が兵庫に願った。
勘介が寝込んだことで困ったひとりが与五郎だった。なぜなら往診時に下僕、助手として一緒に出向く相手がいなくなったからだ。
往診は診療所での診察とは別の難しさを抱えている。それは患者の自宅に往診に行ったとき、患者と医者の一対一の場合もありうるが、対応や治療の是非は勿論、患者が女の場合は神経を使わざるを得ない。
診察時、脈を測り時に肌に触れる必要があるわけだが、二人っきりの場合だと例えば卑猥なことをされたと騒がれても同席していた者がいなければ抗弁が難しくなる…。
「弱ったな…」
与五郎は思案したものの屋敷に勘介のように立ち働ける男女はすぐには無理だったから一人で出向くしか無かった。
「まあ、いまのところは一対一になるような患者はいないので仕方ないか…」
与五郎はそう自分に言い聞かせてその日も診療所が開くと同時に屋敷を出た。
最初に回るのはあの櫛本屋である。ここのところ与五郎は等子と会うのが楽しみ

松平慶九郎5 20210323 haggromo

だったから足取りも軽快にお店に向かった。
「先生。会いたかった」
抱きついてくる等子に、
「等子さん、一昨日も会ったではないか」
と苦笑しながらも与五郎も嬉しそうに隠居の喜多治が寝ている部屋に入った。
「喜多治さん、いかがですかな」
与五郎が医者の顔で喜多治の横に座すと、
「先生と等子が一緒になってくれるというので少し元気がでましたぞ」
喜多治は笑顔を向けたが、与五郎の目から見て余命は半年少しではないかと感じていた。
「おや、今日は勘介さんはご一緒ではなかったですかな」
喜多治の問いに与五郎は状況を話すと、
「それはご不便じゃな…。
先生、よかったら等子をお連れ下され。薬籠くらいは持てるでしょうからな」
喜多治が言い終わらぬうちに等子が与五郎の腕に飛びつき、
「お父様、ありがとう。

先生、お手伝いさせてくださいな」
と腕を揺すった。
「それは嬉しいが、そのお姿では汚れるし目立ち過ぎますぞ」
「料理をするときの割烹着を着たらいかが…先生」
「なるほど。今日は急なことだから仕方あるまい。
ただし等子さん、ひとつふたつ約束してくれないと連れては行けぬ」
与五郎が真顔で言うと等子はその眼前にちょこんと座り込んだ。
「病人や怪我人が相手じゃ。物見遊山ではないから診療中はあくまで助手に徹して私の診断や処方を奉書に書き写して欲しい。
それともうひとつ。治療中はわたしの手を取ったり抱きついてはいかぬ。
よろしいか…」
与五郎が医者の体で言うと寝ている喜多治がクククッと笑った。
「等子さん、貴方ならお分かりいただけると思うが、わたしらは遊びに回るのでは無く病気や怪我で苦しんでいる人たちの痛みや苦しみ、不安を少しでも取り去るのが使命じゃ。
だから医者と助手の仲良きことを見せに行くのではない。

もしこれを守れないなら等子さんだけではなく向島診療所、しいては松平藤九郎さまの御屋敷の信用に関わるのじゃ。
いかがかな…」
と与五郎が切々と説くとふくれっ面した等子は一緒に行きたい一心でコクンと頭を垂れた。
次に与五郎が向かったのは同じ日本橋でも裏長屋に住む棒手振の女房だった。割烹着を着た等子は薬籠を持ち、自宅を出た途端に与五郎の手を握った。
「先生、患者さんの家では大人しくしてますから、町中ではいいでしょう」
等子に満面の笑顔で言われては与五郎に帰す言葉は無かった。
長屋に着いた与五郎は目的の家の前で、
「さちさん、向島診療所の西脇じゃ。入ってよろしいか…」
と声を上げるとか細い声で、
「おねがいします」
の声が聞こえた。
粗末な戸を開け与五郎は躊躇なく薄汚れた六畳間に寝ている女の脇へ座り込んだが等子は初めて見る光景に呆然と立ち尽くしていた。

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

診察が終わり、長屋を出た二人だったが等子は押し黙っていた。
「いかがした等子さん。初めて見る裏長屋に驚いたのであろう」
藤九郎が言うと頷きながら、
「あのお方はお歳がわたしと同じとのこと…。なぜあんなにもお痩せになっているのでしょうか」
と問うた。
「ふむ。無論長患いもあるが、主な原因は貧困じゃ」
「貧困ってお金が無いということですか」
「まあ、簡単に言えばそうじゃ。旦那を亡くして独り身、あの体では働けぬでな。またこれまでまともな治療を受けていなかったのも病気を悪化させた原因じゃな。以前は診療所に通っていたが動けなくなったというので往診となったわけだ」
「先生…」
「なんだな」
「帰り際に小さな紙包みをお渡ししていたましたが、あれは…」
「ああ、あれは金じゃ」

松平慶九郎5 20210323 haggromo

「お、お金ですか」
「等子さん。大店の娘として育ったあなたには想像もできますまいが、貧乏は病気や犯罪の大元じゃ。その日その日を腹一杯食べている我らはいかに幸せだということを知らねばならぬ。
あのさちという女は治療云々の前に毎日きちんと食べなければ意味は無いのじゃ。長屋の皆が少しずつ食べ物を持ち寄ってくれているようだが長屋の連中だって皆その日暮らし…。
いつもと言うわけではないが、何かの足しになろうと小銭をな、置いておくようになったのじゃ」
与五郎は遠くを見つめながら言った。
「ただし等子さん、これは秘密じゃ、よいな」
与五郎の言に素直に「はい」と答えた等子を愛しく思い、その肩を初めて与五郎が抱き寄せた。
その日は櫛本屋を含めて六件回ったが、与五郎は等子を家に送り店先で帰ろうとする与五郎を店主の益太郎が茶の一杯でも…と引き留めた。
客間に座した与五郎の隣にはちゃっかりと等子が座していたが今日の体験から何

松平健九郎 20210323 hagoromo

かを感じ取ったのか些か神妙にしていた。
「先生。等子はお邪魔ではなかったですか」
益太郎が心配そうに問うと、
「いや、お陰様で助かりました。病人と医者とはいえ女子ひとりの場所に入るのはやはり些か躊躇しますでな」
と与五郎は素直に答えると、
「先生。親父から聞きましたが御屋敷の勘介さんが寝込んでいらっしゃるとか。その間だけでも等子をお使いください」
益太郎が哀願するように言うと等子の顔も輝いた。
「それは有り難いが、宜しいのでしょうかな」
与五郎が遠慮がちに言うと益太郎は、
「等子は有り難いことに先生の嫁となることが決まった女です。なにもご遠慮なさることはございません。ただし至らないことはご遠慮なく叱ってやってくだされ。なにしろ親父のせいで箱入り娘、世間を知りません。
等子にとってもよき勉学の場に違いありません」
と頭を下げた。

松平慶九郎5 20210323 haggromo

「そうですか。それではあと数日、朝一番にここのお店に寄ってから往診に出かけることにしますので、等子さん宜しゅうにな」
与五郎が等子に笑顔を送った。
酉の刻前に屋敷に戻った与五郎は診療所の診療部屋を覗くと新一郎と吉太郎そしてお輝は今日の残務整理に勤しんでいた。
「ただいま戻りました」
と診断書を差し出しながら言うと、
「お疲れ様でしたな。
おや…診断書は女文字のようですな」
新一郎が顔を上げた。
与五郎は今日の事情を説明しつつ等子を助手として連れて行ったことを話した。
「先生、女子が一緒ではまずいですかな」
心配顔で与五郎が訪ねると新一郎は、
「何のことがありましょうや。お輝も女医者、よろしいではありませぬか。それに等子さんは後数ヶ月で西脇さまと夫婦になるお方…。
それに…吉太郎さんもご覧なされ、失礼ながらこの診断書、一部薬の名が間違っ

松平慶九郎5 20210323 hagoromo

ている箇所もありますが、初めてとしては上々の出来でございますぞ。大したものです」
というと吉太郎ものぞき込み、
「ほう、本当ですな。これは西脇先生の薫陶があれば立派な助手、いや女医者になるかも知れませぬぞ」
とおだてた。
「そういえば先生方、勘介さんの容体はいかが」
与五郎が聞くと笑顔の新一郎は、
「なんの心配もございませぬ。これまでの疲れが一気に出たのでしょう。後四五日養生すれば元気になりますよ」
と請け負った。
とはいえ勘介が実際に屋敷外に出て働けるようになるには七日かかったが、その間、日本橋、室町、浅草、深川などへの与五郎の往診はすべてではないにしろ白衣を着た等子が一緒だった。
特に往診先が多かった日本橋界隈では与五郎と等子が肩を並べ、時には腕を組んで歩く姿は大いに目立ったから噂も急速に拡がった。ただしその頃には与五郎が

松平慶九郎5 20210323 haggromo

何者であるかも知れ渡ってきたからか、絡んだり囃し立てる者もほとんどいなかったが…。
往診の途中の道すがら、等子は相変わらず与五郎にぶる下がるように腕を組みながらも質問攻めにした。
「先生はお医師を始めてからどのくらい経ちますのか」
「この世から病はなくなりましょうか」
「なぜ向島の御屋敷にご家来衆として落ち着かれましたのか」
「お生まれは」
「西国を主に武者修行とお聞きしましたが、京や大坂もまいりましたのか」
「長崎はどのようなところですか…」
などなどある意味当然のことだが、等子は与五郎の全てを知ろうと思っていたからだ。
それやこれやであっと言う間に七日が経った。
勘介も幸い完治したから元のように与五郎の助手を務められるようになったが、そもそも勘介を雇い入れた理由は男手が少なかったからだ。又八がいたものの、田次郎は高齢だったし又八にしても重労働は無理だった。また重三は主に舟を操

るのが主な仕事だった。
したがって勘介がどう考えようと与五郎の助手として外廻り専門になるのは難しかった。
それと察した与五郎は藤九郎に相談すると、
「そうだな…。お文さんらは勘介の働きぶりを当てにしておる。
聞けばこの十日あまり、等子さんの助手ぶりは…といっても治療云々を期待しては無理じゃが、新一郎先生曰く診察の記録はなかなかよく出来ているとのことじゃ…」
「お耳に入りましたか」
与五郎は些か照れた顔で畏まったが、
「もし、お主はもとより等子さんに異存が無ければ可能な限りで良い、手伝ってもらったらどうだ」
と藤九郎が言い切った。
「宜しいのでございますか」
「良いも悪いも、婚礼は後一ヶ月半ほど先じゃが、お前の女房どのじゃ…。そしてな、ここで一緒に住むようになっても往診時には手を貸して貰えば良い。無論

松平健九郎5 20210323 hagoromo

肝煎りの承諾を得ての話じゃがな。
その方が等子さんにも生き甲斐と共に我が屋敷に慣れる早道でもあろうし、医療に開眼してくれるのであれば少しずつでも良い、診療所を手伝って貰うのも良いと思うがな」
藤九郎が静かに言うと与五郎は両手を突いて頭を下げた。
その日の夕刻、井戸端で与五郎は勘介に、
「勘介さん。話しは聞いておろうがまた時には手伝って貰うことになるが宜しゅうな。二人で北町奉行所の同心を恫喝したのは面白かったのう」
と笑顔で頭を下げると、
「なんの。あっしもお医師の下僕というお役目、はじめてでしたが楽しかったです。
あっ、そういえば西脇先生。先ほど例の蕎麦屋の娘、おかよちゃんが遊びにきましたぜ。すぐに帰りましたが先生のお姿が見えないので寂しがっておりましたぞ」
と報告した。
蕎麦屋の娘とは北町奉行所同心を探るために出向いた折、勘介の知り合いだとい

う蕎麦屋に立ち寄った際、店主の孫娘おかよが足を怪我した…。折良く与五郎は医者に扮装していたこともあり血止めの上で傷口を消毒して薬を塗り、大事に至らなかったことがあり、その後おかよは店主宗二郎につれられて屋敷に遊びにくるようになっていた。

「そうか…。それは残念だったのう」

与五郎が息を吐くように言うと、

「おかよちゃんはお文さんが気に入ったようでべったりでしたぜ」

と勘介が笑った。

松平藤九郎5_20210323 hagoromo

第三章　与五郎の涙

一

岸部兵庫の奮闘で与五郎と等子の婚儀の日取りが決まった。
梅雨時前にという配慮と等子の父親の容体を鑑み、ぎりぎりの五月二十五日とした。
場所は屋敷の大広間と決まっていたが、料理などは女衆も一緒に祝いたいとの希望もあり、近隣にある二つの料理屋に依頼にして運んで貰うことにした。
兵庫は来賓たちの名簿はもとより、婚礼衣裳を越後屋に依頼すること、料理の手配、そして式次第などなどを日々の役目の傍ら着実に進めていた。
文机に向かっている兵庫の背から藤九郎が声をかけた。
「兵庫、何から何まで済まぬな…」
そう労うと、

「なんのことがありましょうか…。目出度いことに関われるのは嬉しいことです、御館さま」
兵庫は笑顔で応じた。
「ただ…御館さま」
「うむ」
「出席者の方々ですが、少々人数にばらつきがあり困惑しています」
「どういうことだ」
「はい。等子さんの方は日本橋のお店のお嬢様ですから兄さまはもとより越後屋さんはじめ近隣の方々に知古の方々も多く出席を希望なさるお方が多いのですが西脇さま側はご承知のように縁故の方もおりませぬ故、いかがしましょうか」
兵庫は人数のバランスが取れない事を悩んでいたらしい…。
「現状ではどんな具合なのだ…」
藤九郎の問いに兵庫は、
「はっ。西脇さま側の来賓は今のところ蕎麦屋の宗二郎さんと孫のおかよちゃんで…」
「ふむ、二人か」

暫く沈思していた藤九郎だったが、ふと顔を上げて、
「兵庫…。そもそも堅苦しい婚礼の式は困ると与五郎も申しておった。でな、どうだろうか…。
金屏風の前に新郎新婦と介添え人が座すとしても親戚筋や来賓らは恒例のとおり新婦、新郎側に別れて並ぶのではなく二人の眼前に一同に座すというのはどうかな」
と呟くと、
「な、なるほど。それで新郎新婦ならびに喜多治さんらがご承諾なら一番宜しいかも知れませぬな」
「うむ。手間をかけるが、喜多治さんに話しをしてくれぬか。それで良しとするなら主賓の三井高清さんにもその旨ご理解いただくように頼むぞ。
そう、何度も大変じゃからして衣裳の確認の際、二人を連れて行ってくれ」
「ははっ。畏まりました」
「それとな…」
藤九郎は小声で兵庫に呟くと兵庫の両眼が光った。
ということで前代未聞の披露宴の式次第が決まってきた。

結局四日後の朝一に岸部兵庫は藤九郎の命を受け、与五郎と共にまずは日本橋の櫛本屋を訪ねることにした。舟は重三が操っていたが、小船に座した与五郎は、
「岸部どの、いろいろとお手数をおかけして済まぬことです」
と頭を下げた。
「なにをおっしゃいますか、御館さまにも申し上げましたがお目出度いことで忙しいのは本望でございますよ」
兵庫も笑顔で受けたが、
「そういえば西脇さま。あまりこうして二人でお話しする機会もございませんでしたが、それがしと西脇さまはひとつ共通のお話しで繋がっているようでございますな」
と話しを向けた。
「ほう、なんでしょうかな」
与五郎が真顔になった。
「いや、深刻な話しではございませぬが、三島の雲助宿でございますよ」
兵庫が懐かしそうな顔をして呟くと、
「嗚呼、なるほど。貴殿は確か…」

松平駿九郎5 20210323 ©

「はい、娘の路子が旅…といっても追っ手から逃れるためでございましたが、その旅の途中で体を壊しましてな、うずくまっているところに御館さま方らが通りがかり我らを雲助宿で養生させてくださったというわけなのです。とは言っても足掛け二日でしたが…」

「ふむ。以前少し御館さまからお聞きしたことがござるが、それがしも体調が悪かったこともあり一ヶ月ほどだったか、客分として世話になり申した。もう少し近ければそれがしの婚礼の席に市村庄蔵殿をお招きしたいところじゃが…」

与五郎が大川のみなもを見つめながら言うと兵庫は、

「西脇さま。せっかくの目出度いお席、お呼びしたらいかがでしょうかな。まだ間に合いましょう」

とたたみかけた。

「ほう、そのような勝手、御館さまがお許しくださるかどうか…」

与五郎が顔を輝かして問うと、

「いやなに…過日、御館さまが西脇どのの同意があるなら早飛脚を立てろとおっしゃったのです」

兵庫が楽しそうに言い切った。

松平健九郎5 20210323 hagaromo

市村庄蔵とは三島の雲助を束ねる頭領である。
重三を舟で待たせた与五郎と兵庫はまず櫛本屋に向かった。
今日の与五郎は束髪ながら着流しに両刀を携えた武士姿だったが、薬籠を持つという変わった出で立ちだった。また兵庫は脇差しのみを携えていた。
暖簾を潜るとまだ早い時刻だからかお客はいず、店主の益太郎と使用人が準備に立ち働いていた。
与五郎たちの姿を見ると益太郎は、
「これは先生。今日は往診日ではございませんでしたが…」
と笑顔で問うた。
「いや、なに婚礼の件でご相談したき儀がありますのでな、急で申し訳ないが立ち寄らせていただきました。
こちらは婚礼の手配一式を取り計らってくださっている岸部兵庫どのです」
与五郎はそう言いながら益太郎の案内で隠居喜多治の伏している部屋へと案内された。
「あらっ、せ、先生…嬉しい」
父親の看病をしていたのか等子が与五郎の姿を認め、兵庫がいるのも構わず抱き

松平慶九郎5 20210323 hagoromo

ついた。
「こ、こ、これ。等子さん…。親父どのに婚礼の件でご相談があるので岸部どのと一緒に伺ったのじゃ。ほれ、腕を放してくだされ」
与五郎は兵庫と視線を合わせながら照れたが兵庫は笑顔で頷いていた。
与五郎は早速喜多治に兵庫を紹介した後、今日伺った理由を説明しはじめたが話しの途中で喜多治は、
「せ、先生…。皆まで申されなくても主旨は分かりました。わたしはこの体でお手伝いもできませぬが、信頼申し上げている殿さまと西脇先生のお考えの通りにお運びいただければ満足でございます」
と布団から両手を合わせた。
その後、せっかくだからと与五郎は喜多治の診察を済ませ、越後屋に向かうことを言うと、
「あたしも行きます」
と等子は嬉しそうにはしゃぎ始めた。
「だって先生、岸部さま。私たち婚礼のことでのご相談なら新郎新婦で伺うのが礼儀でしょ…」

そう等子に言われれば与五郎も兵庫も断れなかった。
江戸一番の大店、三井越後屋の店頭ではすでに大勢の客たちが思い思いの品を見定めていたが、三人の来訪を知った当主三井高清は与五郎たちの袖を引くように奥座敷へと案内した。
そして婚礼の式次第を取り仕切っている岸部兵庫に向かい、
「岸部さま、ご苦労様でございますな」
と労をねぎらった。
兵庫が一通り、披露の宴のあり方を藤九郎の案だとして説明すると、
「な、なるほど。伝統という縛りの範囲内でしか物事をお考えになれない堅物はともあれ、殿様はさすがでございますな。
ええ、ええ…これまでの形などに囚われる必要もございませぬ。ただただお二人の行く末を心からお祝いいただける方々は席順などお気に留めるお方などおりませんでしょう。
手前はそのお考えで結構だと存じます」
天下の越後屋三井高清は満面の笑顔で賛意を示した。
話しが一段落した後に高清は、

松平慶九郎5 20210323 haggromo

「岸部さま。ご依頼いただいたお二人のご婚礼衣装が一昨日にできあがっておりますのでせっかくお二人もお揃いの機会…是非ご確認いただければと思いますが」
と別室へと三人を自ら案内した。
等子はおずおずと与五郎の後から付いてきたが、高清が…、
「こちらでございます」
と襖を開けると衣桁に掛けられた二人の着物が蝋燭の明かりに照らされて光り輝いた。
「こ、これは…」
「うわあ…」
与五郎と等子はその場に崩れるように座り込んだが、その後ろで高清と兵庫は立つたまま二人の反応を楽しんでいた。
「いかがなされました西脇さま」
高清が声をかけると与五郎は両肩を小さく震わせ嗚咽を始めていた…。
「我らは…なんと…幸せ者であろうか…」
与五郎が呟くと大粒の涙が音を立てて落ちた。

松平藤九郎 20210323 hagoromo

その後、等子を櫛本屋に送り届けた与五郎と兵庫は待っている舟の場所に向かって歩き始めたが、
「岸部どの…ありがとうございました」
歩きながら与五郎はぽつりと兵庫に礼を言った。
「なにを申されます。これすべて御館さまのお指図ですぞ」
そう言った兵庫はふと押し黙った。
「どうなされた岸部どの…」
与五郎が問うと兵庫は、
「いや、そういえば娘路子も等子さんと同い年…。早くあのような衣裳を着るようになって欲しいと思いましてな」
と呟いた。
舟に戻るとちょうど、見るからに食い詰め浪人四人が重三の胸ぐらを掴んでいるところだった。
「その舟を貸せと申しておるのだ。嫌だと言うならこうしてやる…」
と拳を上げた途端に与五郎の投げた石つぶてが浪人の手の甲に当たった。
「うっ、なにしやがる」

松平慶九郎5 20210323 hagoromo

駆けてきた与五郎と兵庫に重三は、
「た、助かった…」
と二人の背に回った。
「その舟は我らの持ち舟よ。どこの誰かも分からぬ乱暴者には貸せぬな」
与五郎が薬籠を重三に渡し、一歩前に出ると四人が一斉に抜刀した。
「ああ、馬鹿は痛い目を見ないと分からんかのう」
与五郎が刀も抜かずにさらに一歩踏み出すと兵庫は脇差しに左手をかざした。兵庫は剣術はもともと得意では無かったが追っ手に見つかったりして修羅場を潜ってきたし、藤九郎の屋敷に奉公するようになってからは時に道場で稽古を続けていたから肝は据わっていた。
「しゃらくせえ」
三人が与五郎に、一人が兵庫に駆け寄ったが上段に振りかぶった刹那、兵庫が脇差しを鞘ごと引き抜き、頭で相手の鳩尾を打った。
同時に与五郎に刃を向けた三人のうち一人の刀は刹那抜刀した与五郎の刀で空を飛んで肩を打たれ、二人は胴を抜かれて意識を失った。無論峰打ちだった。
「重三さん、怪我はないか」

与五郎に言われて重三は、
「へい、おかげさまで」
と笑顔で応じると兵庫は、
「しかしさすが西脇どのの剣さばきは凄いですな。抜刀されたのがそれがしにも分からなかったですぞ」
と声をかけると、
「いやはや、岸部どのもお見事でござった」
「さあ、戻りましょうぞ」
三人は肩を並べて舟に向かった。

二

婚礼の日が来た。
近隣にある二件の料理屋、大七と武蔵屋に依頼した豪華な料理や酒の準備が整っ

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

たものの雲助の頭領、市村庄蔵の姿はなかった。
「御館さま、ご出席くださるとのご返事はいただいておりましたが…」
与五郎が残念そうに言うと藤九郎は、
「残念じゃが遠方故様子が分からぬのが歯痒いのう…。しかしなにか急用が出来たのやも知れぬな」
と与五郎を慰めた。
この時代の婚礼の披露は夜に行われたから、夕刻に純白の花嫁衣装に包まれた等子が乗った輿が実家の櫛本屋を出、烏帽子に十徳・白帯姿の輿舁(かごかき)き人夫たちに担がれしずしずと大川に止めてある舟に向かった。なお父親の喜多治は別途駕籠で屋敷に出向くことになっていた。
また輿に寄り添っているのは露払い役のい組の頭菊次郎、そして警護として久世仙之助と長坂角之新そして土屋長四郎が緊張した趣で輿の脇を固め、その後には従者の体で勘介もいた。
総勢五十余名のはっぴを着た「い組」の男衆が高張り提灯の灯りを先頭に木遣を歌いながらの行列は厳かで見事だった。そして等子の輿が日が沈む中、日本橋か

ら何艘もの舟に乗り込み、向島三囲神社手前にある藤九郎の屋敷を目指すと大川の水藻に数々の明かりが映り込み、幻想的な一瞬一瞬を見せてくれた。
舟から上がった一行が陣を立て直し姿を見せると屋敷の内外から歓声があがった。そして煌々と焚かれた門火の明かりの中、輿はそのまま玄関をあがり、奥の間まで運び込まれたが、庭では新一郎や吉太郎、田次郎や又八ら男衆による祝いの餅つきが始まっていた。
等子を迎えた与五郎は半裃と熨斗目の小袖姿だったが、この祝言の日だけにと藤九郎の計らいで徳川葵の紋が光っていた。
もともと屋敷の初代当主松平春貞は尾張の出であったが、無紋で通していた。しかし八代将軍吉宗の信頼を得、「今後は尾州三つ葵でも徳川葵でも好きなものを使え。余が許す」と言われ、以後公式の場では徳川紋を使うことになっていたのだ。
等子が輿から静かに姿を見せたとき、与五郎ならずとも思わず「おおっ」と小さな声を上げた。
等子は練絹の白小袖の上に綾絹の白小袖を着て白の帯を締め、その上に真っ白な

打ち掛けを着用していた。そして被衣(かづき)をかぶった純白の姿でうつむいた等子の紅がひときわ美しさを際立たせていた。
そのとき、一旦大広間から出た又八が慌てて戻ってきて久世仙之助に耳打ちすると仙之助は頷き、落ち着いた所作で藤九郎に平伏した上で耳打ちした。
「な、なに…。間に合ったか、ではな、早速お連れしろ」
と命じた。
祝言の宴に招待状を出していた三島の雲助宿の頭領、市村庄蔵が遅ればせながらいま到着したというのだ。
これから婚礼の儀が始まろうとしたいまそのとき市村庄蔵は雲助五人を従え、大広間の入り口に平伏していた。
「藤九郎さま、そしてご一同さま…お目出度い婚礼の儀に遅れお詫びのしようもございませぬが、西脇どのの喜びのお顔を拝見したく罷り越しました。お許しあれ…」
市村庄蔵は深々と頭を垂れた。
「さあさあ市村どの、長旅お疲れであろう。ご同行の方々、ご覧の通り無礼講の

型破りの披露宴でござる。まずは中にお入りになりお座りなされ」
藤九郎はそう言いながらも仙之助に目で合図し、市村庄蔵を列の前面に座らせて言った。
「方々、ご紹介させていただく…。それがしはもとより新郎の西脇与五郎らも大変お世話になった三島の…そう…雲助たちを束ねている市村庄蔵どのじゃ。わざわざ遠方から駆けつけてくださった由、御礼を申し上げる。
それぞれの挨拶は後ほどすることにして…ではな、式を始めようぞ」
藤九郎が簡単な紹介と婚礼の式の始まりを宣言した。
市村庄蔵らは旅支度を解いたままの姿だったがさすがにいつもの恰好ではなく、庄蔵は玄関で急遽羽織を着て着座した。また伴の五人も着流しの姿だった。
列席者は屋敷の者および親族を除けば、越後屋の三井高清、日本橋両替商相模屋の主人相模屋清右衛門（二代目）らの商人が多かったが、蕎麦屋宗二郎の孫娘であるおかよの可愛らしさが目立った。
そして普段は型破りな言動が多い等子も今日はさすがに神妙にしていたが、与五郎は意外にも泣きっぱなしだった。
与五郎は昨日、藤九郎の前で平伏し礼を述べた際にも嗚咽が止まらなかった。

松平慶九郎5 20210323 haggromo

曰く…

「己が祝福されて妻をめとるなどということは考えもしなかった」

「それも、剣では食っていけぬと諦めていたが御館さまに出会い、明日の食い物の心配をせずとも良くなった」

「さらに何度も心を惑わせた医者になりたいという夢を向島診療所で現実のものとすることができた」

ことなどなどを上げ、恩義に報いるためにこれからも一命をかけてご奉公すると泣いた。

そもそも当時格式のある家柄の武家の場合、婚礼は至極複雑で面倒な決まり事があり、三日三晩続く場合もあったし、一般的に婚礼は婿とその親族で行い、祝宴の時にも婿方の列席者のみだったという。その列席者にしても男子客がほとんどで婦人は参列しなかった。

現代のように両家が一緒に宴席に出て…という訳ではなかった。ただし日を改め花婿が嫁の実家へ挨拶に訪れ、家によってはこのとき嫁方でも婿方で行われた祝言と同様の盃時と膳や品物の贈答を繰り返すこともあった。

松平藤九郎 2021.03.23 hagaromo

したがって藤九郎の屋敷での祝言がいかに型破りのものであったかが伺えよう。
さて、宴もたけなわになった頃、酒も入ったから皆些か口も軽くなっていた。越後屋の三井高清は、
「殿さま。差し支えがなければ三島の雲助宿の頭領、市村さまとのご縁をご一同にご披露いただけませぬか」
と願った。
「合い分かった。そうだな、俺も当事者の一人…ここは全てを知る静香どのにご説明願いましょうかな」
と話しを静香にふった。
一同に頭を下げた静香はおもむろにこれまでの縁を語り始めた。当の市村庄蔵は笑みを浮かべながら盃を口に運んでいたし、五人の雲助たちも笑顔で静香の話に耳を傾けていた。
「一番最初は春貞さまの生前、盟友の米道格左衛門さまが春貞さまの意を汲み、尾張に旅をしたときに遡ります。
確か元文五年（一七四〇年）十月も末のことだったと記憶しています」
そのとき、同行していた格左衛門の妻夏穂が初めての長旅でもあり足のマメが酷

くやむなく駕籠を使った。その時の駕籠かきとの会話で興味を持った格左衛門は勧められるままに雲助らの宿に泊まることになったが、そこで頭領の松谷久四郎の歓待を受け意気投合した。

「その後も春貞さまが尾張に旅したときも立ち寄られ、帰路では松谷さまの死期の近いことを悟った春貞さまは松谷さまを駕籠でこの屋敷にお連れになったのでございます。その時の旅ではわたしも同行させていただきましたが、向こうにいらっしゃる田次郎さんはそのとき春貞さまとたまたまお会いしたのが縁で後年我らの一族となりました」

「ほほう」

「松谷さまはこちらの新界先生の治療を受けましたが如何せん…不治の病とかで三島にお戻りになられてからお亡くなりになりました」

「……」

「その後継者は佐川太一さまというお方でした。佐川さまはお若い頃の藤九郎さまの上司だったとかでお体を悪くした藤九郎さまが佐川さまを頼られ雲助宿にご厄介になりました。

その後、佐川さまのお勧めでここ、向島診療所で治療をするため藤九郎さまは江

戸に出てこられ、それが縁で春貞さまのただ一人の血縁でいらっしゃるお蘭さまと結ばれ、ここに松平藤九郎さまが誕生なされたのです」
すると当の藤九郎は、
「静香どの、誕生とはまたこっぱずかしいですな」
と苦笑するも静香は笑顔で話を続けた。
「佐川太一さまの後継のお方が本日わざわざ三島より文字通り駆けつけてくださいました市村庄蔵さまです」
静香が言葉を切ると市村は一同を見回して丁寧に頭を下げた。
「市村庄蔵さまの代になってからも藤九郎さまは尾張・京への旅でお世話になりましたが、そちらの岸部兵庫さまと娘御の路子さん、そして本日の新郎でございます西脇与五郎さまも市村庄蔵さまにお世話をかけました…」
静香は一旦言葉を切ったが続け、
「ことほど左様に当家と三島の雲助宿とは代々深いご縁がございます。したがいまして新郎は少々遠方なれど是非市村庄蔵さまに今日の晴れ姿をご報告したいとご無理を申し上げてお誘いいたした次第です」
と言い終えて頭を下げた。

すると藤九郎は、
「せっかくだし、なかなかこうした機会は作れないと思うでな、一言市村庄蔵どのからご挨拶をいただこうぞ」
と言うと一同から拍手が挙がった。
市村庄蔵はその場で頭を下げた後、静かに話し出した。
「市村でござる。ご招待をいただいておりましたが大事な式に遅れてしまいお詫びいたす。
言い訳めきまするが予定通りに三島を出立する予定で準備を進めておりましたが、藤九郎さまや方々はご存じのとおり、雲助らの利権を巡り昔しから野武士たちが無許可の駕籠かきや荷運びをやり、不法な金を要求したり、時には追い剥ぎまがいの真似をしたりと旅人を苦しめておりましてな…。そうした野武士たちとの確執が続いておりましたが、出立の前日我らの屋敷などが攻撃を受け、為に出立が遅れてしまいました」
「なんと…」
一同がざわついた。
「お目出度い席に相応しい物言いではございませぬが、怪我人が数人出ましたが

松平藤九郎5 20210323 haggromo

幸い他に大きな問題はないようなので後始末と万が一の場合を想定して後を託し駆けつけました次第…お許し願います」
市村庄蔵は再び頭を下げると上座に座していた西脇与五郎がつかつかと市村ににじり寄り、その膝に頭が付くほど頭を下げた。
「頭っ…。頭と御館さまのお陰様で思いもしなかった仕儀と相成りました。与五郎この恩は一生忘れませぬ」
与五郎はまたまた大粒の涙で顔を濡らしていた。
「西脇どの…。わしらのことなど忘れて結構。しかし藤九郎さまのご恩とご新造さまのご信頼を裏切ってはなりませぬぞ」
そう言い切った市村庄蔵の両眼も真っ赤だった。
一同ももらい泣きが続いていたが、後方に座していたお文が、
「しかしさ、花嫁が泣くというのが披露宴の定番だけどさ、これだけ新郎が泣かれるというのも珍しいよね。
あ、あたしゃ西脇先生をまたまた見直したよ」
ともらい泣きしながら呟くと隣の田次郎や又八らもがくがくと頷いていた。
一方、新婦等子は終始笑顔が絶えなかった。涙を流している与五郎を隣で物珍し

そうに仰ぎ見つつ時に腕を回したり背を撫でたりしていた。
泣くと言えば等子の父親、喜多治は当初こそ涙を抑えていたものの、等子がお色直しで席に戻ったときあたりから嗚咽が止まらなかった。
喜多治の体調を気にしていた井之上新一郎が隣に座し、大きめの座椅子に布団を乗せた上に体を横たえさせていたが、娘の晴れ姿を眺めつつ、喜多治は新一郎に、
「先生…おかげさまで願いが叶いました。これで思い残すことはございません」
と呟いた。
ところで市村庄蔵と五人の雲助らはその夜は屋敷に泊まったものの、やはり雲助宿が気になるとのことで翌朝早くに旅立っていったが、藤九郎と岸部兵庫の二人は門前まで見送り、市村らは重三の操る舟で大川に立ちこめる朝靄の中に姿を消した。

松平健太郎 20210323 hagoromo

第四章　無名の名医

一

梅雨が明け、ぎらぎらと太陽が照る季節になった頃、日本橋や室町あるいは地元近くの小梅村や深川あたりで西脇与五郎と妻等子の白衣の姿が目に付くようになった。

薬籠を持った等子は相変わらず、与五郎と一緒に働けることが嬉しいと空いている手で与五郎の手を握ったり腕をとったりしながら仲良く歩く姿は大げさで無く近隣の名物になりつつあった。

与五郎も患者の前では医者の助手らしく振る舞うことを等子に約束させたが、歩いている時などでは好きにさせていた…。

いや好きにさせていたというより次第に与五郎の楽しみ嬉しさにつながり、これまで味わったことの無い幸福感に満ち満ちていた。

松平康九郎 20210323 hagaromo

「先生、今日はまずはどちらへ向かいますか」
キラキラとした眼差しを与五郎に向けて等子が問うと、
「今日はまず近場の小梅村あたりだ。以前は皆向島診療所に通っていた患者たちだが、病気が重くなったり加齢などで動けなくなった者ばかりだそうじゃ。無論…と言っては叱られようが、そうした者の多くはその日暮らしで医者を呼ぶ金が無い。そうした者達に我らはささやかな力を貸そうとしているわけじゃ」
すっかり医者姿が板に付いた与五郎が笑顔で説明すると等子は、
「先生とご一緒で往診に回るまでもわたしはそうした人たちの存在を知らなかったわけではございませぬが、現実は悲惨なものでございますね」
等子は真顔で言い、続けて、
「わたしがいかに幸せなのかが分かりました、先生」
と絡めた腕に力を入れた。
屋敷の奥に位置する三囲神社脇の道を道なりに東南方向へ少し歩くと広大な水戸徳川家の下屋敷が見えてくる。ここは現在でいえば隅田公園あたりだ…。
眼前に見える常泉寺を過ぎるとすぐ小梅村あたりとなる。
「先生、この辺はお寺と畑ばかりですね」

等子が呆れたように言い捨てると与五郎は、
「そうだな。そりゃあお前が育った日本橋の賑わいと比べればこのあたりは農家ばかりだからのう。
ただし、少し南へ向かい業平橋を渡れば本所に至り町屋が多くなるがな。そういえば等子、足は大丈夫かな」
与五郎は等子の足を気遣った。
結局小梅村の後、深川を回り昼過ぎに屋敷に戻った二人は早速診療所肝煎りの井之上新一郎に報告するため顔を出した。
「ただいま戻りました」
与五郎と等子二人が声をかけると新一郎とお輝そして吉太郎だけでなく新界もいて和やかに向かえてくれた。
「お疲れ様でしたな。いかがでしたかな」
新一郎が手にしていた書物を閉じて問うと与五郎は、
「おかげさまで今日のところは問題があるわけではございませぬが、小梅村の柿蔵さんの怪我がわたしには手に負えないと判断しましたので、乗りかかった舟…何とか先生方にお時間を作っていただけませぬかと思いましてな。

松平慶九郎5_20210323 hagoromo

詳しい事はその診断書に記してございますが…」
と話し出した。
その間等子はお輝が立ち働いていた薬品および備品の整理を手伝っていた。
「ほう…というと手術が必要ということですかな」
吉太郎が問うた。
「はい。どうもこちらに申し出が遅れたようで左腕が化膿してしまったようでもあり、深部まで切開しないと駄目なようです」
「なるほど」
「程度問題ですが刃物の傷程度であれば縫った経験はございますが、後処理の問題もありここは先生方にお願いすべきと思いましてな」
すると、
「小梅村はお隣じゃ。肝煎りや吉太郎さんはやはり抜けるのは難しいと思いますで、私で良かったら同道しましょうかな」
と新界が言うと新一郎は、
「親父、一人で大丈夫ですかな」
心配そうに応じた。

松平慶九郎5 20210323 haggromo

「なに、西脇さんにお手伝いいただければ何ということもないだろうよ」
新界はそう言い切り与五郎に笑顔を向けた後、与五郎の耳元で、
「女房どのはいたく診療の仕事が気に入ったようじゃ。皆も筋が良いと喜んでおる」
と囁いた。

二

その二日後の往診はあの小梅村の庄屋の主人、柿蔵を訪ねるため与五郎と等子が向かったが、ゆっくりとではあるが杖を突きながらしっかりした足取りで井之上新界が同道していた。
与五郎と等子はいつもより嵩張る荷物を手にしていたが手術に必要な道具らであった。
「柿蔵さん、向島診療所の西脇です」

松平鹿九郎5 20210323 hagoromo

与五郎がこの付近ではまずまずしっかりした藁葺き屋根の一軒家の前で声をかけた。
「はい、ただいま…」
と声があり、三十路前か年増が出てきて頭を下げた。娘のおのぶだった。
早速三人は主人が寝ている小さな座敷に案内されたが、柿蔵は新界の顔を見て、
「こ、これは大先生ではないかい。申し訳ねえ」
と両手を合わせたが、包帯を巻いた左腕が痛々しかった。
「ご主人、前回申し上げた通り今日は化膿した場所をきちんと切開するため大先生をお連れしたので安心なされ」
与五郎が言うと柿蔵は無言でがくがくと頷いた。
「では早速患部を拝見しましょうかな…」
新界は自然体で柿蔵の前に座すと柿蔵は左腕を差し出した。包帯を取った新界は、
「ふうむ…。西脇先生の見立て通り、これは切開して膿を出し切らないとなりませんな」
新界は呟くように言うと柿蔵は、

「せ、先生。切らないとダメですかい」
と哀願するように問うた。
「ああ、駄目だな。でないと腕を失うことになりますぞ」
新界の物言いで柿蔵は覚悟を決めたように頷いた。
「ではな柿蔵さん、そこに仰向けに寝てくだされ」
新界はそう言いながらも手際よく敷布団の上に油紙をひき、柿蔵を寝かせ手術道具や血止めの薬などを処置しやすいようにと並べた。
「よいか柿蔵さん。痛いがしばしの辛抱じゃ。手術が上手く行けばまた元気に働けますでな。
ではな、西脇先生と等子さん、そしてな娘さんも親父どのが動かないようにしっかりと押さえておいてくだされよ」
新界がいうと等子が手ぬぐいを堅く筒状にして柿蔵に咥えさせると新界は手ぬぐいで口を覆った与五郎と目を合わせてにっこりと頷いた。
新界は腕の付け根を縛り口に含んだ焼酎を左二の腕から手首に掛けて腫れ上がった傷に吹きかけると「うわあああ」と柿蔵の悲鳴があがった。
一瞬新界は亡くなった妻、およしの背中の刀傷を縫い合わせたときの情景が脳裏

松平健 九郎 2021.03.23 Hagaroomo

に浮かんだ。
再び柿蔵の悲鳴があがり体が仰け反った…。
新界のメスが的確に柿蔵の腐敗しつつあった左腕を切り裂くとどす黒い血と共に異臭があたりに拡がり、娘のおしのは思わず顔を背けたが、等子は物怖じせず柿蔵を押さえながらも新界のメス捌きを不思議なものを見るように見つめていた。
それは与五郎にとっても同じだった。新界のメス捌きはとても八十八になる老人のものとは思えぬほど的確で一切の躊躇いもなく美しい動きとさえ思われた。
いまや日の本で一番有名になったと言って良いあの杉田玄白や若い蘭方医たちが時折井之上新界の顔を見にやってくるのはその人柄の秀でたことだけでないことを与五郎はあらためて知った。
（大先生は確かに蘭方医として超一流の腕をお持ちなんだ、名医なのだ）
と驚嘆した。
メスを振るった割りに出血が少ないのは新界が腕の主たる動脈をきちんと外してメスを入れた証拠でもあった。
（ここまで鮮やかなメス捌きができる医者は江戸でも滅多にいないだろう）
と与五郎はそう思いつつ新界の顔を見るとさすがにその額に汗が噴き出ていた

松平健九郎5 20210323 hagaromo

が、与五郎の視線を追っていたのか等子がそれに気づき、折りたたんだ手ぬぐいで新界の額を拭いた。

「さあ、後は傷口を縫えば終わりだ柿蔵さん。よう頑張りましたな」

新界はそう言いながらも手は一時も休まず傷口を消毒し縫い合わせ、何重にも折り重ねたさらしに薬草を塗ったものを巻いた。

「ではな、後は西脇先生から痛み止めの薬をいただければ終わりじゃ。また明日、西脇先生が術後の様子を見に来てくれるじゃろうが、万一何かあったら、おのぶさん…だったな、連絡を寄こしなされ」

と新界は中腰だった姿勢を胡座に変えて一息入れた。

帰り道、与五郎は素直な気持ちを呟いた…。

「大先生。あらためて大先生のメス捌きの見事さをこの目で拝見しました。先生の腕なら望めば御典医も可能だったかも知れませぬ」

というと新界は「あはははは」と楽しそうに声を出して笑った。それを見た等子は右手で与五郎の手を握っていたが左腕を新界の腕に絡めた。新界も嬉しそうな顔をしつつ、

「わたしは医者になりたくて長崎に二年ほど行かせてもらったが、知り得たこと

松平慶九郎5 20210423 haggromo

より知らぬ事がどれほど多いかを知ったものじゃった。でな、長崎の帰りに実家を通り越してこの向島診療所に小川笙船先生を訪ねたのじゃ。
笙船先生はあの小石川養生所初代肝煎りのお方じゃ」
「はい、お聞きしております」
「春貞さまのお許しをいただき笙船先生にお教えいただき本道の勉強を一から始めましたがな、いやはや毎日が楽しくてのう…。
また通ってくる幾多の患者はまさしくわたしの師匠であったよ」
「患者が師匠ですか」
「そうじゃ。無論笙船先生はわたしの一番の師匠だったが、軽い風邪から死病に至るまで様々な患者が毎日押し寄せてきたわけだが、ひとつひとつの症例をこの目でつぶさに見、そして治療を行うそのことがすべてわたしの教科書となり血肉となったのじゃ」
「それは分かりますが、先生は世に出ることをお考えにはならなかったのですか」
よい機会だからと与五郎は忌憚なく問うた。
「まあ、西脇先生には釈迦に説法なれど、医者として少しでも世の中の役に立ち

松平康九郎 20210323 hagaromo

たい、病人や怪我人を楽にしてやりたいと考えわたしは幸い医者になれた。
春貞さまも笙船先生もな、およしと一緒に…女房どのじゃが…独立するなら応援すると言ってくださったが、わたしほど大切にしてもらった医者はそうそういないだろうて…」
一呼吸した新界は、
「医者に限らず、独り立ちして看板を上げれば食っていくのは大変じゃ。最新の医療器具を揃え、良い薬を仕入れて治療に最適な空間をというか環境を整えるには金がいる。蘭書一冊手に入れるにもわたしの若い頃には大変じゃった。そうなれば医者を続けるには金儲けを考えねば立ちゆかなくなる。そうすると医者の仕事そのものが疎かになろう。
向島診療所は春貞さま以来、屋敷の全面的な支援があり、有り難いことに我ら医者が金の工面に走り回ったことは一度もない。
そもそもわたしはきれい事に聞こえるかも知れぬが、名を知られたくて医者になりたかったわけでもなく、人並み以上に金が欲しくて医者になったわけでもない。一生新しい事を勉強しつつ患者に向き合うことだけで満足だったのじゃ。それに医者医者というが、われら蘭方医にしても人の病気の仕組みや体の仕組みを

松平藤九郎5 20210323 hagaromo

知り尽くしたわけではない。
笙船先生の口癖ではないが、知らない…分からないことばかりと言っても良いくらいじゃ。金儲けや名誉より一人でも多くの患者を治したい、助けたいという気持ちが強かったが、西脇先生…」
「はっ」
「わたしは日の本一の幸せな医者なのじゃ」
「……」
「日本一の師匠に巡り会っただけでなく皆に頼られ、大切にされ、承知のように一時期春貞さまが亡くなられた後は屋敷の当主にもなった。またこうして長寿にも恵まれておる…。
そしてよき仲間たちは勿論、およしと巡り会い、新一郎という後継者もできた。
これ以上何を望むことがあろうか、そうではありませんかな」
そう言いながら笑みを浮かべる新界を見ていると与五郎は温かい涙が流れるのを抑えきれなかった。
「どうなされた」
新界が気遣うと、

松平慶九郎5 20210323 hagoromo

「いや、なんだか先生のお話をお聞きしていると、生きているこの今が嬉しくて嬉しくて…」
与五郎が立ち止まって涙が落ちぬようにか、青空を仰ぐと等子が、
「うちの先生は最近涙脆くて…」
と笑った。

屋敷の開き門を等子が真ん中で右側にいる与五郎と手を繋ぎつつ、左側の新界の腕に自分の腕をからめたままで潜ると、腹がかなり目立つようになった美保とお文そして勘介が立ち話をしていた。
「ただいま戻りました」
等子は何の衒いもなく声を上げるとお文と美保が三人を見て笑い出し勘介が笑顔で手を叩いた。
「大先生、嬉しそうなお顔をしてなさるよ…」
お文が声を上げると、
「孫娘に腕を取ってもらっているみたいじゃろ。よいものよのう…。
等子さん、ありがとう」

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

新界は満面の笑顔で腕を外すと杖一本で診療所に向かった。すると等子は待ち焦がれたように与五郎に抱きついた。
与五郎も困ったような照れた顔をしたが、最近では少しは慣れたのかされるがままだった。
「いいなあ…西脇先生」
勘介が声を上げるとお文は、
「そう。夫婦仲の良いことは一番の幸せだよ。
そういえば、女房が旦那に抱きつくのは当屋敷の伝統なのかも知れないよ」
と呟くと皆がお文に注目した。
「いやさあ、春貞さまの奥方…幸江さまも時に旦那に抱きついていなさったからね」
とお文は懐かしそうに呟いた。

松平慶九郎5 20210323 hagoromo

三

新界が診療所に顔を出すと診療所は相変わらず待っている患者がまだまだ途切れていなかった。
「お帰りなさい」
「お疲れ様でした大先生」
と声が上がった中、新界は、
「肝煎り…。ちょいと手伝いましょうかな。またすぐに西脇先生も来られますぞ」
と申し出た。
診察室では新一郎と吉太郎そしてお輝はもとより路子が立ち働いており、裏方ではおたみも手伝っていたが患者はまだまだ途切れる様子はなかった。
「大先生、助かります」
「親父、疲れてませぬか」
などの声が交差する中、新界は診療室の一郭にどっかりと座して、

「さて、次のお方をお呼びしてくだされ」
と路子に願った。
すぐに与五郎が診察室に入ったので担当はともかく医師が五人となり診察は捗っていった。
「おや、今日は大先生…お珍しいですな」
先ほど新界たちが往診に向かった小梅村にも近い押上村の隠居大輔が新界の面前に座し頭を下げた。
「今日は患者さんが多いようなのでな、老いぼれも手伝いじゃて。
さて、どうなされた…」
新界は手際よくかつ親身になって患者を診ていった。
その衝立の隣には西脇与五郎が陣取っていたが、等子はいそいそと路子に教えを請うていた。
その情景を新一郎と吉太郎は楽しそうに眺めながら己の担当する患者の診断および治療を進めていたが、診療部屋の端ではお輝がお腹の大きくなった女を診ていた。
ということでいつしか役割分担ができていた。

松平慶九郎5 20210323 hagoromo

肝煎りの新一郎は外科および内科、吉太郎は眼科および歯科そしてお輝はいまでいう婦人科と内科を受け持っていたが与五郎は外科と内科を、そして往診担当医として働き始めていた。
患者の列が切れたところで新界は早々に診療所を新一郎らに任せて茶室に向かった。なぜなら久しぶりに静香に薄茶を点てるので…と誘われていたからだ。
「遅くなりましたが、お邪魔して宜しいか」
茶室のにじり口で新界が問うと、
「どうぞ。お待ちしておりましたよ」
と静香の声を聞きながら入るとそこにはお園もいて新界に頭を下げた。
「今日も診療所は大変お忙しいご様子。我らは茶室でくつろいでいるのは申し訳ない気がします…」
老いても美しい静香が茶を点てながら呟いたがお園が、
「大先生、少し前まで御館さまがここにおいでございました」
と言った。
「おや、そうでしたか。御館さまもたまには息抜きをされないと…」
新界が静香の差し出した茶器に手を伸ばしながら呟いた。

松平勝九郎5 20210323 hagoromo

すると静香が、
「確かに…。しかし御館さまにここの所、例の異能の力の出し具合を僭越ながらご教授しておりましたが、さすがに剣の達人…私がお教えした方法とは些か違いますがそのお力が覚醒されたようで、急ぎ道場で試したいとお帰りになったところでした」
一呼吸入れた静香は、
「また嬉しいことにお園さんもその片鱗を体で覚えられたようで今少しご努力されれば実戦にお役に立つと思いますな」
と嬉しそうな表情を見せるとお園が頭を下げた。
「いや、わたしはすでに老いぼれ故将来についてお手伝いなどできませぬが、やはり屋敷の将来が気になっておりました。御館さまは勿論、お園さんに異能の力が備わるとすれば、人手不足の我らも大きな戦闘能力を持つことになります。刀の振り回し方も知らぬわたしが申すのも烏滸がましいですが、五百人…いや千人もの武家を味方にするより嬉しいお話しです。
嗚呼…美味しゅうございました…」
新界は茶器を置きながらそう呟いた。

「で、せっかくですからお園さん、その力とやらを拝見させてくだされ」
新界が願うと頷いたお園は膝の上に置いた左手を心持ち上げ、人指し指と中指を開き、新界が眼前に置いた茶器に向けた…刹那、茶器がすっと一寸ほど新界に近づいた。
「おおっ、動きましたぞ」
新界が感嘆の声を上げると、
「日々、静香さまの薫陶をお受けしながら努力をしているつもりですが、まだこの程度なのです」
とお園は目の見えない顔を新界に向けて微笑んだ。
「いやはや、勝手な事を申しますが静香どのも今のようなお力を出せるまでには我らの気がつかないところでご努力されたはず。
お園さんもきっと大成なさいましょうぞ」
新界が嬉しそうに言い切った。

一方、通い稽古の者たちが帰った春江館道場では藤九郎と久世仙之助ら家臣たちが思い思いの稽古をしていたが、一人座禅をしていた藤九郎は「かっ」と両眼を

見開き、
「仙之助、済まぬが相手をしてくれぬか」
と叫ぶように願った。
「はっ」
仙之助が素早く座している藤九郎の前に頭を下げて座ると藤九郎は、
「なにか体が欲していると思われる動きが湧き上がってくる…。
真剣で俺に打ち込んできてくれ」
と命じた。
何ごとかは分からなかった仙之助だが、藤九郎の命のまま腰に愛刀を差して藤九郎と相対した。
藤九郎は右片膝を立て、腰に差した真剣の脇差しの鍔元に左手をかざしながら、
「いざっ」
と声を出した。
新保金之助や天野三十郎らは不思議な気配を感じたか、稽古を中断して壁際にそれぞれ座した。
「まいります」

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

仙之助が立ち上がり、すらりと刀を抜き中段に構えた。
直後振りかぶった仙之助は「えいっ」とばかりに切り込もうとした刹那、動けなくなった。
「うっ…」
それでも押し込もうとするが見えない固い壁に遮られているようで一歩も進めない。
藤九郎はと言えば、左手で腰に差した柄を握ったままだったが、仙之助の様子を確認した上で立ち上がりそのまま一歩前に出ると、
「な、なんだ…」
仙之助は藤九郎が前に出た距離だけ押されて仕方なく後退することになった。
不思議なのは上段に構えた両手が振り下ろせないのだ。
ふと何かに気づいた仙之助は一瞬飛び退くと体が自由になった。そして思わず、
「御館さまっ」
と声を出すと藤九郎もふっと体の力を抜き、
「ご苦労でした」
と仙之助の労をねぎらったが、壁際の一同もやっと呼吸を整えられるようになっ

た。
「お、御館さま。これは静香さまの異能を会得なさったということでございますな」
仙之助が感嘆の声を上げると藤九郎は、
「いや、やっとここまで可能になったが静香どのの力には足元にも及ぶまいよ」
と笑った。
藤九郎が言うには、壁は作れたが静香のようにそれに向き合っている相手を吹き飛ばす力はないしその方法もまだまだ分からないという。
「静香どののように、特定の人物の腕や足を捻り切るといった力はまだまだ無理のようじゃ」
そう呟きながらも額の汗を拭いた。
「しかし御館さま。この異能…何と申して良いか…刀を抜かずして相手の技や攻撃を封じることができまする。やはり恐ろしい技でございますな」
仙之助が言うと壁際の一同も頷きながら、
「何とか我らにもその片鱗でも良いので身に着ける方法はありませぬか」
と口々に藤九郎に迫った。

「ふうむ、俺もお主たちに少しでも伝授できるきっかけを探しているが、今のところは己の身で精一杯じゃ。
ただ、ほんの入り口じゃがひとつ感じたことだが、俺の場合…この力を本当に発揮できるのは怒りの感情が高まったとき…という感じがするな」
と笑いつつ、
「また懸念もある…」
「……」
「我らに出来ることは他者にも出来うる可能性があると考えなければならぬ。静香どのが何故あのような恐ろしいまでの力を持ち得たのか、なにか秘密があるようにも思うが、もし我らの敵に同じような力を持つ者が出てくればこれは刀による戦いとは比較にならぬ悲惨な戦いになる予感がする。
ある意味で封印した方が世のためかも知れぬとさえ思うのじゃ」
藤九郎は深い深呼吸の末にそう言い切った。
そのとき路子が慌てて道場に駆け込んできた…。
「お、御館さま。大変でございます。大先生が…」
そこまで叫んだ路子は道場の入り口にへたり込み、涙の顔を上げたがそれが何を

物語っているかは言葉を発しなかったものの、藤九郎はもとより家臣一同察して立ち上がった。
路子が喘ぐように、
「お、大先生が茶室でお倒れになりました」
とやっと言葉にしたとき一同はその言を背に聞きながら茶室に駆けていた。
茶室の躙り口にはお輝をはじめ西脇与五郎らが集まっていたが狭い茶室内には新一郎と吉太郎が入り診察をしているという。
「俺だが入って宜しいか…」
静かに藤九郎が問うと中から吉太郎の声で、
「どうぞお入りくだされ」
と落ち着いた返事があった。
藤九郎が茶室内に入ると静香の腕の中で新界は不思議な笑顔を向けた。
「おお、大先生。皆が心配して駆けつけておりますぞ。しっかりなされ」
藤九郎が新界の右手を握りながら言うと、新界は無言で頷いた。
新一郎そして吉太郎の判断でなるべく動かさないようにという配慮で新界はそのまま茶室に一旦寝かされた。

急ぎ寝具が持ち込まれ、新界はそこに仰向けになった。
「親父…落ち着いたら部屋に運ぶが、いま暫くここで我慢してくだされ」
新一郎は実父の新界にそう声をかけながら藤九郎に目配せして外に出るように促した。
踏み石をいくつか越えながら藤九郎は、
「大先生のご様子はいかがか…」
と新一郎に問うと、
「どうやら心の臓が弱っているようです。どこが悪いというよりご承知のように父も高齢。息子が申すのも辛いものがありますが、そうそう長い命ではございますまい」
と呟いた。
しばらく様子を見た後、新界は己の屋敷に寝かされたが、看病はいまや女医者として知られたお輝と診療所の新米等子の二人であった。
そこへ粥を静香が運んできた…。
「これは静香さま。大変お手数をおかけいたします」
新界の息子新一郎の嫁でもあるお輝が頭を下げると静香は座しながら、

松平慶九郎5 20210323 hagoromo

「なんのことがありましょう。大先生はお輝さんの舅であると同時に私にとっても大切な戦友でございますからな」
と笑顔を送った。
「戦友…でございますか」
まだまだ屋敷の事情に疎い等子が驚いたように呟くと、
「大先生が元文四年（一七三九年）のこと、長崎からの帰りに小川笙船先生のためにと建てられたここ向島診療所にお立ち寄りになり、そのままお仲間になられましたが、私はその翌年秋に御屋敷に盗みに入りましてな、春貞さまに捕らえられそのまま働くことになったのです」
「なんと…」
「その後度重なる賊や忍びなどによる攻撃にあったり、天災にも遭いましたが新界さま…大先生とは長きにわたり共に御屋敷のために戦こうて参ったのです。無論大先生は武器ではなく医師としてでございますがな」
静香は誇らしげに言い切った。
新界は新一郎らの治療とお輝や路子、等子らの看護のお陰もあってか起きられる

松平健太郎 20210323 hagoromo

までになった。しかし歩行は無理だったし新一郎らにも止められていた。
「井之上新界倒れる」の報はすぐに江戸市中に伝わり、杉田玄白や桂川甫周ら盟友たちが見舞いとして列をなした。
見舞客は客間に順次通されたが、当の新界と直接会うことが出来たのは杉田玄白ら数人だけだった。無論それは新界の体調をおもんばかってのことだった。
見舞客は蘭方医だけではなかった…。
三井越後屋の三井高清など大店の商人、新界に治療を受けた農家や棒手振といった人たちは勿論、吉原の四郎兵衛会所や浅草弾左衛門らもひと目新界の姿を見たいと集まってきた。
「なんだかさあ、縁起でもないことをいうけど、この人の集まり方はまるで葬儀みたいじゃあないか。驚いたねぇ…」
お文があらためて感嘆すると客たちの世話係を担当していた岸部兵庫は、
「お文さん。それだけ大先生は大した名医なのでございましょうな」
と言うと、五人の客を門前まで見送りした西脇与五郎が近づき、
「それがしたちは井之上新界という蘭方医の存在を至極当然として受け止めていましたが、いやはや知る人ぞ知る江戸一番の蘭方医なのですぞ」

と見舞客が続く客間の方を見据えて唸った。
井之上新界という蘭方医はあの杉田玄白や前野良沢らと共に直接間接にタートルアナトミアの翻訳にも貢献した。しかし自身はそれを公言することもなく、さらに医療の現場に出ることを第一と心がけたために新界自身、著作や記録といったものを一切残さなかった。
為に後世にはその名さえ忘れ去られたが、新界自身、
「わたしは生涯小川笙船先生の一番弟子を自負し、春貞さま、藤九郎さまのお役に立つべく心がけてきた。それが一番の望みであり幸せだったからだ」
と常々言葉にしていた。
新界は三週間もすると文机の前で蘭書を楽しむまで回復した。ただし新一郎ならずとも医者である新界自身、再度心の臓の発作があれば今度は助からないだろうという覚悟があったから、それだけ毎日毎日を思い通りに生きようと懸命でもあった。
そして十一月に入った三日、新一郎が診断のため新界の前に座り、脈をとり、竹の筒を使って心臓の鼓動を聞いていたとき等子が慌てて飛び込んできた。
「先生、美保さまが産気づきました。いまお輝さまがお部屋にお入りになってい

松平慶九郎5 20210323 haggomo

ると思います」
等子が報告すると、
「わかりました。わたしもすぐに駆けつけましょう」
と新一郎が腰を上げると新界が、
「新一郎…慌てることはない。生まれるのはまだ少し先じゃろうて…。でな、済まぬがわたしを産室へ連れて行ってくれぬか」
と願った。
「何を申されます親父どの。そのお体では赤ん坊を取り上げるのは無理ですし、お体にさわりましょう。お輝に任せておけば大事ございますまい」
新一郎が止めようとするが新界は、
「勘違いするでない。お前たちが頼りないと申すのではない。お前たちの腕は一流じゃて信頼しておる。
そうではなく、新一郎…。私の命もあと僅かじゃ。
あの世やらに出向く前にな、形だけでもこの世に生まれてくる新たな命に触れてみたいのじゃ。それに私が医療の現場に居合わせる最後の機会となろうからな」
微笑を浮かべながらの新界の願いを医者として、また息子として無下に突っぱね

松平慶九郎5 2021-03-23 hagoromo

ることは新一郎にはできなかった。
美保が産気づいたとはいえ、診療所の仕事を休むわけにはいかない。産室として用意されていた部屋にはお輝と等子が常駐し、診療所は新一郎と吉太郎、そして等子や路子が立ち働いていた。
いよいよ路子が破水し、出産が間近となったとき、西脇与五郎に背負われて白衣の新界が姿を見せた。
「義父さま…。お体は大丈夫ですか」
お輝が心配して声をかけたが、
「なに、形だけでも手伝いたくてな」
新界は立たない足腰を中腰にしてお輝の隣に座ったが、その背は与五郎が支えていた。路子が思わず頭を下げた。
半時ほどして美保は玉のような男の子を産んだが母子共に元気だった。新界は泣き叫ぶ産み落とされたばかりの赤子をお輝から受け取り、宝物でも扱うように両手で押し抱いていたが、その両眼には涙が溜まっていた。
「美保さんや、よう頑張りましたな」
と美保の労をねぎらった後、赤子に向かい、

松平藤九郎5 20210323 hagaromo

「お前さんも頑張ったのう…。親父どのが首を長くして待っておるぞ」
と声をかけると赤子は不思議に泣くのを止めた。
そしてその十日後、お染も無事女の子を出産し母子共に元気であった。

早くも師走となり、屋敷内でも新玉の年の準備で慌ただしくなってきたが、久世仙之助と美保の一子は仙一郎、土屋長四郎とお染めの娘は淳と名付けられた。
そんな慌ただしいときに訃報が舞い込んだ。それは等子の父親である喜多治が亡くなったのだ。しかしすでに近々命が尽きることは廻りも本人も覚悟していたし小間物屋のお店も等子の兄益太郎が数年前に後を継いでいるし混乱はなかったがさすがにいつも明るい等子も数日間はうち萎れていた。
実父が亡くなったこともあるのだろうが、等子は新界の介護と面倒を喜んでやるようになった。
新界も等子の開けっぴろげな性格が気に入ったようで、実の孫娘に対するように等子の一挙一動に目を細めていた。

松平慶九郎5 20210323 hagoromo

四

それやこれやで文化二年（一八〇五年）が明けた…。
いつもよりかなり遅い時刻となったが、毎年のように全員が大広間に集まり正月膳を楽しんだ。
屋敷の正月膳は恒例で大名でも頬が緩むような豪華な料理がずらりと並んでいたが、今回初の等子は目を丸くして驚いていた。
「先生、こんな豪華な料理は初めてです…」
と隣の夫西脇与五郎の腕を取るようにしてしばらく箸を付けずに見つめていたが、もう二人、屋敷の者ではないが、蕎麦屋の宗二郎と孫娘のおかよがこの席に呼ばれていた。
「爺ちゃん。これ全部あたいの分なの？こんなに食べられないから持ち帰っては駄目かしら…」
とこれまた身を乗り出して驚いていたが、今年七つになったばかりのおかよの可愛らしさは与五郎や静香の取り合いになった…。

年頭の挨拶で藤九郎は、
「皆も承知の通り、久世と土屋にそれぞれ子供が無事生まれた。ここにいる者は文字通り家族ぞ。
両親もそれぞれ忙しい。皆も赤子のこと…心して守ってくれ」
と話すと一同から、
「はっ」
「承知しました」
の声が続いた。
すると藤九郎の一子で数え十四歳になり上背も大人顔負けになってきた春幸が、
「父上、わたしもお守りいたします」
と声を上げたので藤九郎とお蘭の相好が崩れ、
「よき心がけじゃ。頼むぞ…。
しかし春幸もほんの少し前までは赤子だったがのう」
と藤九郎が目を細めると、春幸の養育係である藤文が、
「御館さま…」
と声をかけた。

「ふむ…」
「僭越でございますが、若様の御元服もそろそろかと存じますが」
藤文はすでに凜々しい二十五歳の若者になっていたが、常に目立たず春幸に付き添いその成長を助けてきた。また近年は日々時間を作り、久世仙之助より新陰流の手ほどきを受け、みるみる腕を上げていた。
「藤文よういうた。そうじゃのう…。
兵庫、またまた手数を掛けるが藤文と話し合い、良き日を選び春幸の元服をな、宜しゅう頼む」
藤九郎が命じると岸部兵庫は、
「ははっ。承りました」
と答えた。
昨年秋に倒れた井之上新界は、昔春貞の妻幸江が出産の折に使った短い足のついた椅子に座していた。そして量は食せないものの正月料理を楽しみ少しの酒を舐めていた。またここの所些か元気のない田次郎だったが、豪華な箱膳が並ぶにつけて目を輝かした。
「大先生、お具合はいかがですかな」

松平慶九郎5 20210323 haggromo

藤九郎が上座から声をかけると、
「いやはや、ご心配をおかけして申し訳ありませぬ。何しろ歳が歳ですからな…」
と笑った後、
「立ち歩くことは新一郎…いや、肝煎りたちに禁じられておりますのでな、普段はこれまで心に留めておいた蘭書に目を通してばかりです。
しかし御館さま。この歳になって今更ですが、若い頃の望みが叶ったわけでありがたいことです」
新界は頭を下げた。
続いて藤九郎は宗二郎に声をかけた、
「宗二郎さん。正月三元日は我らもお務めは休みじゃ。おかよちゃん共々よかったらここに泊まりなされ」
というと、おかよが「わあああっ」と歓喜の声を上げ、
「お殿さま。ありがとうございます」
と両手を上げて喜びを表したが、宗二郎は恐縮し、
「お殿さまにこうして呼んでいただき見た事もない正月膳をご一緒にいただける

松平健 九郎 2021.0.23 ©

など罰が当たりそうですが、その上にそのような我が儘など許されるものでしょうか」
と畳みに両手を突き頭を下げると隣の勘介が、
「親父っさん。御館さまがああ申してくだされたのだ。特に用事がなければゆっくりされるといいですぜ」
と背中を叩いた。
「いやはや、蕎麦屋の爺に特別用事があるはずもございませぬし、おかよとの二人暮らし…。
おかよのあのような嬉しそうな顔はこれまで見れませんでしたから、ひとつご厄介になってよろしゅうございますかな」
宗二郎がそう言いながら再び頭を下げたが、無邪気なおかよは静香の膝の上に座り込んで煮物に箸を付けていた。
正月の二日は屋敷の恒例で主に商人たちが挨拶で集まることになっていたし三日は特に予定はなく本当の意味でそれぞれの正月を楽しんでいた。
四日からは向島診療所が始まり、いつもどおりの日常が粛々と進むはずだったが、昼前のこと又八が慌てて居間に飛び込んできた。

「た、大変だあ。道場破りがっ…二人…」
と言ったきり肩を上下させていた。
丁度居間には藤九郎と家臣団全員がいたので仙之助が、
「それがしが追い払ってきましょう」
と立ち上がると藤九郎が、
「仙之助。この正月早々道場破りとは流行らねえ…。きっと金欠でお年玉稼ぎのつもりで来たのだろうよ。帰れといって大人しく聞く耳を持つ連中ではあるまい。
よし、肩慣らしで俺が相手をする故、道場に案内してくれ」
と命じた。
藤九郎が道場に入ると見るからに薄汚れた中年の侍が二人立っていて、その前に仙之助が制するように立ちはだかっていた。
「これは、正月早々に道場破りとは風流なお方たちだな。
まずは言っておくがここは町道場ではない。したがって道場破りはお断りだが、帰れと申して大人しく帰る御仁たちではあるまい…。
故に腹ごなしに松平藤九郎がお相手いたそうか…」

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

と木刀を三本手にして二本をそれぞれに投げた。
板壁側にはすでに家臣団が静かに座していた。
「では、まず名乗っていただこうか。
窺うにそれぞれなかなかの腕前とお見受けいたすが…」
藤九郎が促すと、
「道場破りに名など必要あるまい。尋常に相手をせい」
一人が怒鳴るように言い放った。
「名乗らぬと申すか、それで尋常に…とは笑止な。それでは野党と同じではないか…」
藤九郎が挑発するように呟くと二人は、
「なにっ。ぬかしたな…」
と言いつつ、三間ほどあった間合いをいきなり狭めて切り込んだ…刹那、藤九郎は左手で握った木刀を青眼に構えると右掌をその峰に置く不思議な構えをした途端、
「うわあっ。な、なんだあ」
二人は何が起こったかが分からないまま、木刀の切っ先が藤九郎との距離半間ほ

松平藤九郎5 20210423 hagoromo

どで見えない壁にぶつかっていた。
（御館さまは異能の効力を試すと共に楽しんでおられる）
仙之助らも驚愕しながら成り行きを眺めていた。
「どうした。名無しの権兵衛たち…」
藤九郎はそう言いながらすっと前に出た刹那、二人の小手を打ち砕いた。
「ぎゃああ…」
木刀は床に落ち、二人は痛みより何故負けたかも分からず立ち尽くしていたが、
藤九郎が西脇与五郎に目配せすると、なんと準備がよいことか、与五郎は脇に置いてあった薬籠を持って二人の前に出た。
「それがしは医者だ。手首の応急措置をしておくからそこへ座りなされ」
と命じると自失呆然の二人は素直に与五郎の前に座した。
手首を固定し、湿布薬を塗り包帯で巻いた与五郎は薬籠を閉じながら、
「これからは無闇な振る舞いは止めることだ。正月早々飲み食いに困る苦しさは俺たちにもよう分かるが、物事にはやりようというものがある…。
さあ、これは御館さまの慈悲でお主たちに渡すが、二度と顔を見せるな。でないと今度は首の骨が折れる。

さあ、持って失せなされ」
そう言いながら袖口から一両小判を取りだして二人の前に置いた。
二人の道場破りは軽く頭を下げて春江館を走り去ったが、板壁側に座した家臣団は立ち上がる者はなく、
「御館さま。今の技、我らにも体験させてはいただけませぬか」
と迫っていた。
苦笑しながら藤九郎は、
「正直申すとな、前にも申したが俺の技はまだまだ静香どののそれとは比べものにならぬ未熟なものよ…。
この技の怖いところは己は見えない壁を置いたつもりでも己がそれを確かめるすべはないことだ。少なくとも今の俺はそうだ」
「な、なるほど」
「したがってな、過信し異能が効いていると思ったものの相手が難なく突破してはこちらが危ないのだ」
「……」
「こればかりは己の技の完成度を上げるしかない訳だが、とにかくこれが難し

い…」
すると仙之助が、
「御館さま。何度も繰り返すようですが、我らに伝授は叶いませぬか」
と問うた。
「仙之助…。そして皆の者、良く聞いてくれ」
藤九郎はその場に座して一同を眺めつつ、
「よいか、俺がお主たちに技の伝授を拒んでいるのではないのだ。以前に静香どのが申されたことがいま俺にはよう分かる。
要はじゃ、剣でも柔術でも己が『こうすれば、こうなる』という道理が分かっておれば例え形だけでも他者に伝えることはできる。例えその通りにできなくても形は伝えることは出来る…」
「はい」
「しかしな、この異能の技は俺自身も道理がさっぱりわからんのだ」
藤九郎が苦笑した。
「な、なんと…」
「いや、嘘ではない。なぜ技がかかるのか、かけることができるのか、それは何

故かが分からんのだ。
どうやら形より気持ち、思念が重要だということは朧気ながら分かるが、ではどうすればこうなるのか、見えない壁の強さはどれほどなのか俺にも分からんものを他者に伝授のしようがないのじゃ」
「しかし、御館さまは静香どのからの伝授なくして術を会得なさいました。それは何らかの啓示があったからではございませぬか」
仙之助は食い下がる…。
「ふうむ…。俺も色々と考えたのだ仙之助。
なぜ静香どのはこうした技が身についたのか。ご本人も得ようとして得た技ではないと申された。
ただな、俺たち剣者はある意味研ぎ澄まされた感覚というものを修行の内で得ているはずじゃ」
「はっ」
「静香どのは剣者ではないが、忍びの術を学ばれ、例えば己の気配を消すことは無論、相手の心の中というと言い過ぎかも知れぬが…読み、それを逆手にとって動く。

松平慶九郎5 20210323 haganomo

諄いようじゃが、俺にもこの技というか術が何故使えるのかは分からんが、いくつか大切なことがあるとは感じている…」
「ほう…」
「是非お教えくだされ」
の声が重なった。
「まず、剣にも通じることだが強い集中力が必要だ。そして己の技…術は効くのだという信念を持つこと…。最後にこれが鍵のような気がするが…」
藤九郎は呼吸を整えて続けた。
「まだ確信は持てないが、相手に対峙したときに強い怒りがあると技が強くなるようじゃ」
「何と…。しかし先ほど御館さまの表情には怒りは見受けられませんでしたが」
と新保金之助は言い切った。
「うむ。怒りといっても眉を吊り上げ、歯ぎしり…することなく静かで強き怒りもあるはずじゃ。
剣にしても怒りをそのまま表に出せば己の平常心に保つことは難しくなる。
俺にはまだ静香どののように、相手の腕を捻り折るといった強い力はないが、強

い思念は必要に違いあるまいよ。
したがってな各が工夫し糸口を見つけるしかあるまいよ…」
藤九郎がそう言ったとき、勘介が慌てて道場の上がり框で叫んだ。
「御館さま。大先生がまたお倒れになりました。
すぐ来てくだされ」
その声で藤九郎以下一同が腰を上げて飛び出した。

新界の部屋に飛び込むと、新界は蘭書が乗った文机の前で静香に抱かれていたが、静香の前に座している等子が涙を流しながら顔を左右に振っていた。
藤九郎らとほぼ同時に姿を見せた新一郎は、
「親父…」
と一声口にしつつ脈を取ったが力なく項垂れ、藤九郎を仰ぎ見た。
前野良沢や杉田玄白よりも先に長崎で阿蘭陀医学を学び、本道も極めようと小川笙船に弟子入りし、医道の道に誠実に精進し続けた稀代の蘭方医が散った。享年八九歳であった。

第五章　春幸の妹

一

井之上新界が亡くなっても翌日から向島診療所はいつものように診療を続けていたが、葬儀の日程の前後三日間は休診とした。
新界の死は屋敷全体を深い悲しみに包んだが、弔問客も多くゆるりと悲しんではいられなかった。
新年早々の葬儀も一区切り付いた一月十五日の夕刻、診療を終えた新一郎が藤九郎に面会を求めた。
「先生、お入りくだされ」
の声で頭を下げつつ藤九郎の面前に座した新一郎は一通の文らしきものを差し出した。
「何ですかな…」

藤九郎が問うと新一郎は神妙な顔をしながら、
「親父の遺言が文箱から出てきましたが、ご覧のように御館さまへの文でございましたのでお届けにまいりました」
と呟いた。
「ほう…拝見しよう」
両手で文をおし抱くようにした藤九郎は丁寧に封を解き、巻紙に綴られた遺書を読み始めた…。
「な、なんと…」
藤九郎の両眼が涙だで溢れ、驚きの表情に変わった。
「御館さま。いかがなされました」
そこには…。
（御館さま。永らく、本当に永らくお世話になりました。心より感謝を申し上げると共にお礼申し上げます。
私事ですが私は廻船問屋の次男に生まれ、親の理解があったため好きな道へ進むことができましたが小川笙船先生、春貞さま、そして御館さまに出会えましたことは生涯の喜びでございました。

松平藤九郎5 20210323 hagaromo

春貞さまがご逝去なさった後、致し方なくと申せば罰が当たりますが御屋敷を守るために当主となった時期がございましたが、尻が落ち着かず正直心細い日々でしたが幸いご縁があり御館さまに当主をお引き渡しできたことで私の役目も辛うじて意味があったのではないかと自負しております。

ともあれ向島診療所にしても我らの思うようにさせていただけましたこと、この難しい世情に鑑みますといくら頭を下げても下げ足りないと存じます。

何卒、今後も診療所のことならびに新一郎をはじめとした者たちにご理解をいただければ嬉しゅうございます。

さて、これからは新一郎も知らない話しでございますが、御館さまもよくご存じの日本橋両替商相模屋清右衛門どのに同封の預かり証文をお示しになられ六十年あまりの間に蓄財した額、一千二百両を御館さまにお譲りいたしますことをここに記させていただきます。

うち八百両は私がおよしと結婚した際、親父より医療に励めという言葉と同時に兄に一切の相続やらに関する権利を譲ることを条件にと祝い金として受け取ったものです。また差額の一部は妻およしが残したものです。しかし私は御屋敷から毎月きちんと給金をいただいておりましたし、三度の食は御屋敷からいただいて

おりましたから医療に専念することで他に金を使うすべも機会もございませんでした。ただただたまに蘭書や実用は疑問ながらも阿蘭陀製の珍しい医療器具を購う程度でしたから私には不要な金なのでございます。
また念のために申し上げますが、息子新一郎にも常々おまえには向島診療所の肝煎り以外なにも残さないと申し伝えておりましたし、息子に限らず汗をかかずに転がり込んだ金などに頼ればろくな事はございますまい。
勿論御屋敷の運営は岸部兵庫どのより常々耳にしておりましたが、お陰様で不安な材料はないとのことで私の勝手なお願いはご迷惑かも知れませぬが、これからは益々世は乱れ、難しい時世になるようにも思えます。
願わくば是非世のため人のためにお役立ちいただければ望外の喜びでございます。
皆様に助けられ、よき一生でございました。感謝。

井之上新界拝　）

とあった。
二度目を通した藤九郎はその遺言書と表書きされた文を新一郎に差し出すと、新一郎は、

「よろしいので…」
と聞いた。
無言で頷いた藤九郎の手から渡された文を読み始めた新一郎はすぐに嗚咽を始めた。
「先生、いや新一郎どの。親父どののご遺言、異存はありませんかな」
涙で濡れた顔を拭こうともせずに藤九郎が問うと新一郎は、
「無論のことでございます。私も親父の様に生き、死にとうございます」
と突っ伏した。
その後藤九郎は岸部兵庫を呼び、新界から託された証文を見せて名義を松平藤九郎に書き換えるように指示し、
「後の運用などについては別途相談いたすでな」
と申し伝えた。
その日のうちに兵庫が両替商相模屋清右衛門を訪ね、預かり証文を差し出して事情を説明すると二代目清右衛門もそのしわくちゃな両手で顔を覆いながらも泣いていた。
「岸部さま…申し上げるまでもなくこの種の蓄財やご依頼は個人のお立場のもの

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

でございますのでいかに当店が殿様にご信頼をいただいているとはいえ…それだからこそ井之上先生がご存命の内は申し上げるわけにはいきませんでしたし先日の葬儀の場でお出しする話題とも思えませんでしたので落ち着かれた後にご相談をと考えておりました。

しかし手前などが申すのもなんでございますが、大先生は間違いなくお江戸一の蘭方医でございましたな」

と清右衛門は鼻をすすりながらも、

「お申し出の件、確かに承りました。後はどうなさるかをご指示くだされ」

と頭を下げた。

二

厳しい寒さの二月上旬のこと、金杉水道町の岡っ引き吉次が血相を変えて飛んできた。

庭の掃き掃除をしていた勘介が吉次の話しを取り次ぎ、これまた青い顔をして仙之助に報告をしに動いた。

「だ、旦那…大変です。北町奉行所付近の呉服橋東あたりから出火したようで、あの宗二郎さんとおかよちゃんらの行方が不明とか…」

吉次は蕎麦屋宗二郎と藤九郎らが親しいことを知っていたから知らせてくれたのだった。

「火事か…。それは火消したちに任せるしか無いが、勘介、与五郎と手の空いている者たちを集めて火消しの邪魔にならぬよう探してくれ」

と藤九郎は命じた。

江戸の町は火災が多かった。毎年特に十月から三月にかけ頻発するのが常だった。

例えば杉田玄白が残した「鵲斎日記」によれば、江戸だけで享和一年には木挽町、横山町、飯田町など五件の火事が記録されているが同年末に「当年は温かく、雨多く、風少なく火事が少なかったので平穏なり」と書かれている。しかし翌享和二年には八件、享和三年も八件の火災が、記録されている。

しかしどうやらこれでも瓦屋根の普及や火除地の整備などのおかげで少なくなっ

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

たようで、かなり遡った天明七年にはなんと二十三件の記録がある。
ともかく急遽西脇与五郎、新保金之助、勘介と重三の男四人が屋敷を飛び出した。
呉服橋あたりに駆けつけてみると宗二郎が営んでいた蕎麦屋は跡形も無く焼け落ちていた。
「こりゃあ、ひでえ…」
思わず重三が声を上げたが、元このあたりを縄張りにしていた岡っ引きだった勘介を認め、火消しの男が汚れた顔のままで声をかけてきた。
「親分、いや…勘介さん。先ほど火は消し止めたがご覧のとおりだ…」
「ご苦労でしたな。いや、邪魔をするつもりはねえが蕎麦屋の宗二郎さんと孫娘とは知り合いでな、心配して駆けつけたが無事かどうか知らねえかい」
「それよ…」
火消しの男は一瞬顔を歪め、
「俺もこの目で確認した訳ではねえが、親父さんは逃げ遅れて駄目だったらしいぜ」
「なに…」

松平豊九郎 20210323 hagaromo

絶句した四人だったが、男は続けて、
「孫だったか、子供は被災者たちが取り急ぎ集められた山王御旅所（現在の日枝神社）にいると思うぜ」
と気の毒そうに呟いた。
「ありがとうよ。で、火元は蕎麦屋ではないんだな」
念を押した勘介に男は、
「嗚呼、火元は五間先の湯屋のようだ」
その声に頭を下げた勘介たちは山王御旅所に駆けつけた。
火事としては小規模だったようだが付近のお店や長屋を焼かれたことには違いなく、山王御旅所は騒然としていた。
まだ煤で汚れている人たちは勿論、火傷や怪我で苦しんでいる男女が並べて筵に寝かされていた。
そこで立ち働いている女に勘介が声をかけた。
「忙しいところすまねえが、おかよという七つの女の子を知らねえかい。蕎麦屋の孫娘なんだがな…」
如才なく聞くと中年の女は、

松平健九郎 20210323 hagaromo

「ああ、その子ならこの裏側にいると思うよ。でもさ、宗二郎さんは気の毒だったねえ…」
と眉を寄せた。
「親父さんは駄目だったようだが、亡骸はどうなったのか知ってなさるか…」
「聞いた話し、あの一体は火元に近く火が強くてさ、二十数人が犠牲になったようだけど半分焦げた煙草入れがあったので宗二郎さんも亡くなられたと分かったらしいけど、遺体は誰か分からないのでお役人たちが片付けられたようだよ」
「そうかい、そりゃあおかよちゃんにとってはえらいことだなあ。あっ、ありがとうよ」
勘介は与五郎たちの元に戻り本殿の裏に回るとそこは女子供の避難場所になっていたが、勘介や与五郎の姿を認めたおかよが顔の半分を涙と煤で汚れたままに、
「おじちゃん！」
と声を上げて勘介に抱きついてきた。
七歳のおかよが、ただ一人の血縁者である宗二郎が死んだことをどれほど認識していたかは分からないが、同じ猛火の中を逃げ惑ったおかよは、朧気ながら爺様は火事で死んだことを知っていたらしい。

それだけに知り合いの勘介たちの顔を見てどれほど安堵したかは勘介たちにも分かったが、身寄りがいなくなった子供をこのまま置いていくことは忍びなかった。

「西脇の旦那…新保の旦那…」

勘介は藤九郎の重臣たちである二人と顔を合わせながら無言で頷くと、二人も静かに頷いた。与五郎や金之助もおかよを屋敷に連れて行こうと考えていたのだ。

「よしっ、おかよちゃん。おじちゃんたちと屋敷に行って美味い物でも食べようか…」

あえて宗二郎のことは口に出さずに勘介が言うとおかよに初めて笑顔が浮かんだ。

勘介が側にいた役人に声をかけると役人は勘介の顔を覚えていたようで、松平藤九郎の屋敷におかよを引き取る旨の許可は簡単に下りた。

山王御旅所を出ると別の役人に呼び止められた。

「子供を連れてどこへ行く…」

警備担当のようだが、男四人が女の子の手を引いて歩く姿は異様だったのかも知れない。

「こ、これは北村の旦那…ご無沙汰をしております」
勘介が頭を下げると、
「おお、お前は勘介ではないか。元岡っ引きがこんなところで何をしておる」
と北村と呼ばれた同心らしき男が、後ろで頭を下げる与五郎らを眺めながら問うた。
事情を簡単に説明すると同心は、
「さようか。お前は向島の松平さまの御屋敷に奉公しているんだったな。話しは聞いたが、貧乏くじを引かされたものよなあ」
と同情する口調で、
「分かった。後で俺からもおかよの身の振り方について調書に記しておこう」
と機嫌良く言い放ったが、勘介は、
「旦那。ご面倒をかけるついでにいまひとつお願いがありますんですが…ご承知のようにおかよの爺様宗二郎さんが亡くなった由。焼け残った煙草入れがあるとのことですが遺留品となれば北町のお預かりとなっていると思いますので後ほど供養をしたいと思います。これまたお引き渡しの手続きをお願いいたします」
勘介は頭を下げつつ、自然な身のこなしで袖から取りだした一朱を北村の袖に落

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

とした。
「お、おお…。しかと引き受けた。後ほど受け取りにまいれば分かるようにしておこう」
北村は袖を振るように踵を返して門前に向かった。
「さすが、餅屋は餅屋だなあ」
金之助が感心して声を上げると、
「お恥ずかしいことですが、ああしておけば後が容易になりますのでな」
勘介はこともなげに言った。

三

屋敷に戻った四人はおかよと一緒に藤九郎に報告すると、
「ご苦労でした。またよくやってくれましたな」
と藤九郎は労った後、茶を運んできたお染に、

「お染さん。おかよを風呂に入れてやってくれんか」
と願い、お染とおかよが部屋から姿を消すと、
「宗二郎さんは駄目だったか…。
その煙草入れが手に入ったら、我らの手で供養してしんぜようぞ」
と苦渋の呟きをしたが、
「それはそうと、おかよをこれからどうするか…」
そういいながら四人の顔を見渡した。
「ここで育ててはなりませぬか」
与五郎が口火を切ると藤九郎は、
「いや、お主たちも皆そのつもりでおかよを連れてきたことぐらい俺にも分かるは…」
と笑いながら、
「子供一人を事情を承知で放り出す訳にもいくまいよ。また知らない仲でもないわけだから宗二郎さんの無念を晴らす…供養という意味でも屋敷で育てるのはかまわん…」
藤九郎が言い切ると勘介と与五郎が頭を下げた。

「問題は、親代わりを誰にするかだな」
ふっと息を抜いて藤九郎が呟くと、
「あっしではだめですか…」
と勘介が小さな声でいった。
「駄目だな」
「……」
「いや、お前が父親に相応しくないと申すのではない。いくらおかよが慕っているからといっても独身の男のお前に父親を課すのは酷というものよ。お前はこれから女房をもらい、そして一人前の男になる…。事情はともあれ、子がいてはこの時点でいくつかの機会を閉ざしてしまうことになるからな」
藤九郎の口調は優しかった。
「御館さま…」
「では、それがし夫婦ではいかがでしょうかな」
与五郎が口を開いた。
「お主たちは夫婦になったばかりで、もしかしたら明日にでも懐妊の兆候ができ

るやも知れぬ。その思いは嬉しいが、一時の感情でお主たちに大きな重荷を背負わせる訳にもいくまいよ」
藤九郎が言い切ったとき、襖が開き藤九郎の妻お蘭が顔を見せた。
「茶を運んでまいりましたが話しが聞こえてしまいましてな…。
お前さま。我ら夫婦の子として育てましょうぞ。春幸の妹として…。
お手伝いいただける方々は西脇さまや勘介さんはもとより、お文さんもおりますでな」
と盆を置きながら笑顔を向けた。
その後、藤九郎は茶室に静香と仙之助、そして新一郎とお文を呼んだ。井之上新界亡き後、この四人が藤九郎と共に屋敷を守って行くことになっていた。別途茶を点てるのはお園だった。
「集まって貰ったのは他でもないが、おかよの身の振り方のことだ」
そう藤九郎は口火を切って先ほどの結論とお蘭の決意を皆に話した。
「さすが、奥方さまでございますが御館さまはそれでよろしいのでございますか」
と新一郎が問うと、

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

「女房どのが申し出たことだ。俺がとやかく言うことはないし、それが一番良いのではないかと思ってな」
と藤九郎が頷きながら言うと、
「おかよちゃんは何歳でしたか、御館さま」
お文が聞くと代わりに静香が、
「七歳と聞きましたよ」
と答えた。
「嗚呼、爺様が亡くなったのは辛いことですが七歳といえばお輝がこの御屋敷にあたしと共にお世話になったのがやはり七歳の時だったから、すぐに慣れましょうな」
お文が言うと、お輝の夫である新一郎は、
「そうだったようですな。わたしはあまり記憶がないのですが、お文さんたちからお聞きするに、随分とお輝に遊んで貰ったらしいですな」
と遠くを見る目付きで呟いた。
「と言うわけでな、親代わり…いや、俺たち夫婦が親としておかよを育てるが、承知の通り町屋の娘だ。本人は多々戸惑うこともあろうが日常は相変わらずお文

松平藤九郎5 20210323 hagaromo

さんをはじめ皆に世話をかける…。よろしく頼む」
藤九郎が頭を下げたので一同が恐縮したが、
「御館さま…。今年いっぱいは思うように遊ばせ、来年からは藤文どのとわたしが読み書きをはじめ論語などを少しずつお教えしましょうかな」
と静香が言うと、
「御館さまのお子となるのはなかなかに大変なんだね」
お文が真顔で呟いたので一同に笑いが起こった。
続けてお文は、
「そうだ…御館さま。
あたしたちはおかよちゃんのこと、なんと呼べばいいのかね。御館さまのお子をそこいらの子と同じく『ちゃん』と呼んではまずいのでは…。なにしろ御館さまのお子となればおひいさまだからね」
と言うと一同も気にしていたらしく頷いていた。
「早速迷惑をかけるが、今のところは『ちゃん』でも呼び捨てでもよい。そしてな、そうそう気を使わんでくれ」
と藤九郎は苦笑した。

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

そしてその日からおかよは屋敷で暮らすようになったが、爺様がどうなったかを子供ながらも承知していたか、時折涙を浮かべるものの宗二郎の話しは出さなかった。また母となったお蘭は静香たちの力を借りつつ、おかよに日々少しずつ屋敷における不文律なあれこれを教えるようになったが、等子も町屋の女だったが故におかよを不憫と思ったのか、事あるごとに世話を焼いていた。

またおかよが藤九郎とお蘭の子供となったことに一番喜んだのは長男の春幸だったかも知れない。歳は大きく離れていたが、妹が出来たことに喜びを露わにして仲良く面倒を見ている姿は誰が見ても微笑ましかった。

ともあれ、おかよが春幸を「兄さま」と呼ぶようになるのにそんな時間はかからなかった。

当のおかよは廻りが心配していたよりも容易に屋敷に慣れていった。勿論おかよの心の内は誰にも分からなかったが、これまで爺様と二人暮らしだったのが何十人もの家族が増えたような環境に目を輝かせていたがやはり宗二郎の面影を無意識にも追っていたのか、ここのところ些か元気のない田次郎ら老人たちに好んで近づき遊び相手としていたから田次郎らも喜んでいた。

寒さもやっと和らいできた三月になると、おかよが意外なことを口にした。
「なに…おかよ、もう一度申して見よ」
藤九郎が居間で刀の手入れをしていたときに入って来たおかよに聞いた…。
「父上さま。わたしも剣術をやりたいです」
今度は明瞭に言い切った。
同席していた久世仙之助や土屋長四郎も思わず顔を上げた。
「ふうむ…。おかよは何故剣術をやりたいのじゃ」
と藤九郎は言いながらおかよを膝の上に座らせながら問うた。
「だって、兄さまも母上も剣術をおやりですし、それに…」
「それに…なんだ」
「わたしも強くなりたいのです」
おかよの表情には子供ながらにも強い決意が窺われた。
(強くなってどうする…)
という問いが喉まで出た藤九郎だったが、その言葉を呑み込み仙之助と長四郎の顔を見つめつつ、
「そうか…。合い分かった。

それでは明日から少しずつ稽古をつけるように取り計らおうぞ。
よいな…」
藤九郎が言い切るとおかよは嬉しそうな顔をし、頭を下げて駆けだしていった。
その後ろ姿を追いながらしばらく無言でいた藤九郎だったが、
「さて、どうしたものかのう」
と両腕を組むと仙之助が、
「おかよちゃんは御館さまらに感謝をしつつもそれなりに悩んでいるのではありませんかな。なにか夢中にさせてくれることを見つけたいのではありませぬか」
と口を開いた。すると、
「それがしもそう思いますが、よいではありませぬか…。
午前中には商家の娘御たちも多々道場にまいりますから、それがしたち皆が分担して姫さまにお教えしましょうぞ。
それに…」
「ふむ」
「女剣豪といえば以前『松平春貞一代記』を拝見したとき、御屋敷には当時の奥方さまの他に夏穂さまという名手がおいでだったようですし…」

長四郎が言うと、
「夏穂さまか…お懐かしい。俺の師匠であったよ。
凄いお方でなあ、足捌きが宙に浮いているようでな、両足の足袋の底が汚れないのだ。同時にあのお方の突きは伸びるのでお相手は大変だったなあ。
叶わぬ事だが、今一度竹刀を交えてみたいものよ」
藤九郎は懐かしそうに呟いた。

松平慶九郎5 20210323 hagoromo

第六章　腐敗

一

屋敷内もいろいろと変化があったりと大変だが、向島診療所はそれとは無関係に相も変わらず多くの患者が押しかけていた。
先の火事で怪我をした者、咳が止まらないという者、飯屋で喧嘩をして傷を負った職人、そして労咳や梅毒に冒された者などそれこそ様々な問題を抱えた患者たちが診療所が開く半時程前から並んでいた。
「吉太郎さん、今朝は朝から患者の数が多いようですから準備ができ次第早めに開けましょうかな」
肝煎りの新一郎が言うと、
「さようですな。そろそろ桜も咲くという季節ですが今朝は風もあって些か寒いですし…。そういたしましょう」

松平健 九郎 2021.0.23 ©

と吉太郎も答えると、お輝と西脇与五郎の医師たちも顔を見合わせて頷いた。その気配を受けて路子やおたみが静かながらも急ぎ準備に動いた。
最初に待っていたのは壮年の付き添いに伴われた婦人だった。新一郎の前に座った老女は明らかに労咳を患っていたが初診だった。
「幸さんとやら、ここは初めてのようですが、これまでどこかの医者に診てもらったことはありますかな」
新一郎が問うと、付き添いの男が、
「この幸さんはわたしの長屋…この先の小村井村の借家人でしてな、これまで小石川養生所にお世話になっていたのですが…」
とうつむき、なにか言いにくそうな物言いをした。
「ふうむ。よき治療をさせてもらうためにこれまでどのような薬を飲んだか、どのような治療を受けたかを知りたいからお聞きするのです。
また言うまでもないですが医者は患者の個人的な秘密を他に漏らすことはありませぬので安心して正直に申してくだされ」
新一郎の真摯な態度に安心したのか男がぼそぼそと語り出した。
それによると…

松平慶九郎 20210323 ISBN

幸は昨年夏にやっとのことで養生所への入所の順番が回ってきたという。喜んで入所したのは良いが、我慢できない問題が起きたという。

「治療や先生方の接し方が悪うございましたかな」

小石川養生所とは二代目肝煎りの小川隆好までは頻繁に行き来があったが、現在は六代目小川太左衛門であり、一時代前のような関係はなくなっていた。

「いえ、お医師の方々には特に不満はございませんが、看護中間たちの扱いが誠に酷いものでございました」

と男が詳しく話し出したが看護中間とは直接入所患者たちの世話を担当する者たちのことだ。

話に寄れば…

そもそも患者が医師に接するのは僅かな時間であることがほとんどだ。それよりはるかに長い時間…一日の大半は看護中間の元で病棟生活を強いられる。

「中には扱いがぞんざいだったり口の悪い者もおりますが、それは大した問題ではございません。

お耳に入っているかも知れませんが最近養生所の入居者が激減しているのも、わたしが幸さんを退所させたのも彼らによる様々な不正な行為が目に余ったからで

松平慶九郎5_20210323 hagoromo

ございます…」
男は苦渋の顔で言い放った。
「なんと、不正ですか」
思わず新一郎が声を出すと衝立一枚で仕切られている両隣の吉太郎や与五郎らも思わず耳を欹てた。
「先生…。生意気を申しますが、養生所はそもそも金が無く薬も購えないしお医者様にもかかれない者達の最後の砦でございました」
「さよう…」
「しかし昨今の養生所の入所生活は何かと物入りなのでございますよ」
新一郎は頷きながらも手は休めず、寝かした幸の診断を続けていた。
「物入りとな…」
「はい。しばらく前からの慣習だと言われましたが、入所の際に銭四百文を持参せよと言われましてな」
「なんと…」
思わず新一郎は顔を上げた。
「我ら入所者からすれば、看護中間の心証を悪くしたくないと何とか工面して四

松平慶九郎5 20210323 hagoromo

百文を持参いたしました」
「……」
「さらに入所から四、五日後に入所者家族から看護中間の元へ挨拶料として銭三百文を持参するという暗黙の慣習もあるそうでして」
「ううむ」
新一郎が唸った。
「それだけではございません、先生。看護中間の下には役係りと呼ばれる古株の入所者がおりましてな、飲食物を押し売りするのでございますよ」
男は無念の表情で訴えた。
「それらの悪行を奉行所は知っているのですかな」
当然の疑問を新一郎が発すると、
「はい。ご存じなはずです…」
男は即座に答えた。
「わかりました。我らも養生所に直接口出しできる立場ではありませぬが、南北両御奉行とも知らない仲ではございませぬ故、機会を見て調べてみましょう」
新一郎はそういうしかなかった。

「さて、幸さんとやらは間違いなく労咳を病んでおります。高麗人参のお薬を処方しておきますので朝夕に忘れずに飲むようにな…いや金の心配は無用ですぞ。そしてお薬が無くなったらまたおいでなされ」
新一郎の笑顔に安心したのか男は何度も頭を下げつつ、幸を大八車に横たえて帰って行った。
その日の夕餉の席で新一郎は朝一で診た小石川養生所から退所せざるを得なかった男の話をした。
「ほう、それが本当なら酷い話しだな…」
藤九郎が呆れると、小石川養生所初代肝煎りの小川笙船を知っているお文が、
「笙船先生がお聞きになったら嘆かれるよ」
と顔を曇らせた。
「御館さま。我らがあれこれと口出しするは、同業の悪口と捉えられても困りますが、ここは調べて見る必要がありますな」
新一郎が言うと、
しばし考え込んでいた藤九郎は、
「ではな、勘介。南町の伊丹助三郎さんにお会いして相談してみれくれまいか」

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

と呟いた。続けて、
「我らだけでは小石川養生所をあれこれと見て回ることはできぬ。皆も承知のようにあそこは町奉行所の管轄じゃ。
伊丹さんの義父は小石川養生所開所の折は見廻り同心も兼ねていたというからな」
藤九郎はそう言いながら茶を口に運んだ。

二

翌日の夕刻、勘介は早速南町奉行所に出向き、伊丹助三郎を訪ねた。助三郎も顔馴染みだという近くにあった居酒屋に入り、二人はその小さな座敷に上がり込んだ。
「旦那とこうして盃を交わすのはお久しぶりですな」
勘介が徳利を向けて言うと、

松平藤九郎5 20210323 haggromo

「そうだな。しかし町奉行の同心など何ごとかが無ければ声などかかってこないものよ。今日の話もなにか厄介事ですかな」
助三郎は機嫌良く笑った。
勘介が廻りを気にしながら昨日新一郎から聞いた小石川養生所の不正に関する話をすると盃を飲み干した助三郎は、
「実はな、ここだけの話、多少話しは聞いておったが、それほどの事とは知らなんだ…」
と真顔になった。
「で、藤九郎さまはこの俺に養生所を調べろと仰せか」
と問うた助三郎に、
「いや、調べられるものであればわっしに調べろと仰せなのですが、旦那に二つお知恵を貸していただくように申しつかりまして…」
勘介も手酌で一杯目の盃を空けた。
「ひとつは、この件どれほどお奉行所の耳に入っているかどうかということ、二つ目は養生所の実体を調べる方法はなにかございましたらお教えいただきたいので…」

松平健九郎 20210323 hagaromo

勘介はありのままに助三郎に願った。
「そうか…。
一つ目の問いは万一奉行所がそうした不祥事を知って放置をしていたとなればご老中などからお叱りがあるだろうな。
お前だから端的に申すが、先ほども言ったように薬の与え方や入所者に物品を強請るといったことがままあるということはお奉行も知っておろうが、今の話は桁違いの問題じゃて、素直に奉行所に報告はないのだろうな。
それに…」
「へい」
「言いにくい話しだが、養生所の見廻り同心の中にもその看護中間たちに急所を押さえられている者がいても不思議はあるまいよ。であれば意図的にそうした話しは我らには上がってこない…」
助三郎はこともなげに言い切った。
しばらく考えていた助三郎だったが、
「これを言ったら後の言葉が出て来なくなるが、そもそも御上のやり方に無理があるんだ」

松平藤九郎5 20210323 hagaromo

と呟き、
「よいか勘介。俺の知っている限りでは本道の医師の受け持ち患者数は三十七人でな、年最低七十四両が必要らしい…」
「患者一人二両といった計算ですな」
「うむ。しかし支給額は三十五両相当らしい。要は開所当時医者に薬代は役料とは別に支払われていたが、いつしかそうなってしまったのだ」
「それでは旦那、差額はどうするんで」
「それは単純よ。差を医師の自己負担にするか、あるいは薬の量や質を落とすしか道はないわけよ」
「そんなあ…。それじゃあ医者は割に合わないではありませんか」
「そのとおりだ。そんなこんなで医者の勤労意欲が増すわけはないのだ」
「なんだか、こちらも出鼻を挫かれる感じがしますな」
二人は思わず顔を見合わせたが助三郎は、
「二つ目の件だが、我らが調べに入った所で看護中間にしても医師にしても普段通りの行動はしないに違いあるまい」
「でしょうな」

「いま養生所は入所者の数に余裕がある。理想的なこととしては誰か密偵として入所できればよいのだがな。それであれば俺も推薦できるぞ」
「なるほど。確かにあっしなどが見学させてくれと言ったところで正確な日常など分からないでしょうな。
伊丹の旦那。密偵うんぬんに関しては御館さまと相談いたしますのでその節はよろしくお願いします」
勘介が頭を下げた。

屋敷に戻った勘介は藤九郎に面会を求めた。
「ご苦労でした」
藤九郎は勘介の労をねぎらった後、一通りの話しを聞いたが、
「なるほど。奉行所も薄々は感じているが、そうなれば藪をつついてなんとやら…になりかねない為、無視しているようにも思えるな」
と言った。
「藪をつついて蛇ですか…。蛇とはなんでございましょうな」
「この元凶は、俺にはやはり役料の不足にあるように思う」

「……」

「よいか。伊丹さんが申されるのだから間違いはないだろうが、だとすれば役料不足…年間の予算不足が悪事の根源に違いあるまいよ。役料や薬代が十分に支給されれば医師や看護中間たちもいま少し自分のお役目を省みるだろうが。それに役料が十分出せるならより優秀な看護中間はいくらでも集まるに違いあるまい。

お上もそれを分かっておるにしても、現在の待遇では中間たちを辞めさせるとその日から入居者が困ることになるし後釜もなかなか決まらんだろう」

藤九郎は腕を組んで天井を睨んだ。

「しかし御館さま。それとこれは別…。そもそもが金が無く十分な薬も飲めず医者にもかかれない者達を救済するために小石川養生所はできたと聞きました。今のままでは医者や中間うんぬんの前に入居者たちが一番迷惑しますし、場合によっては命にかかわりますぜ」

勘介は口角泡を飛ばすといった風で言い切った。

「その通りだ。このままで良い訳は無いが、根源にお上の予算という問題がある なら改善は簡単には済むまい…。

それから養生所の実情を探る件だが、先ほど田次郎が来てな…」
「はい」
「自分にその役目を命じてくれと申すのだ。最後のご奉公だとな」
「田次郎の親爺がそんなことを…」
「うむ。本人曰く、幸い自分は加齢の為に足腰が重くいま診療所の厄介になっているが、加齢が主な原因とは言え間違いなき病人だ。まさか健康な者が病人を装ったところですぐに疑われようから自分は適任者だとな」
「た、確かにそうではありますが、危険はございませんかな」
勘介は心配になって言った。
「でな、一応新一郎どのに聞いてみたのだが、酒の飲み過ぎの他は問題の足腰にはだが、軽い中風であるものの一週間十日、少々過酷な場所に置かれても命に別状は無い…。しかし医者としてはお勧めはしないがとな」
藤九郎は苦笑をしながら答え、
「それでも田次郎は是非やらせてくれと迫るのでな…」
「はい。であれば願ってみましょうか御館さま。
最近親爺は足腰が弱くてお役に立たないと嘆いておりますし、それが気力を削ぐ

松平健九郎5 20210323 ©Hagaroo

ことになっているようですから…」
「分かった。ただしいきなり養生所に出向いても受け付けて貰えんだろうから、誰か知り合いの名主とか大家は知らぬか…」
ということでそれから七日後、田次郎は勘介が頼んだ小舟町の提灯長屋の家主である長治郎と共に小石川養生に向かった。
道々勘介は、
「親爺さん。例え劣悪な場所でも命の危険はないと思うが、万一危ないと思ったら逃げてくだされよ」
というと、
「分かってるよ勘介さん。それに御館さまに拾われる前の俺っちは乞食同然の毎日よ。例え筵の上に寝かされようと屋根のある場所なら御の字だあな。それに御館さまが銭を持たせてくれたし、こうして看護中間たちの機嫌を取るため酒も持たせてくれた。
心配ないですぜ」
と笑った。

松平慶九郎5 20210323 hagoromo

三

同じ日に藤九郎は新一郎に断り、西脇与五郎を連れて南町奉行所に根岸肥前守鎮衛を訪ねた。

根岸肥前守鎮衛は寛政十年（一七九八年）に南町奉行となり、文化十二年（一八一五年）まで十八年の長年にわたって在職し、死去直前にも加増され、最終的に一千石の旗本となった人物である。

下級幕吏出身のくだけた人物で、大岡忠相や遠山景元とはまた違った意味で講談でも注目を集め、例えば平岩弓枝の「はやぶさ新八御用帳」シリーズをはじめ、小説・テレビ時代劇で題材とされている。また定かでは無いが「遠山の金さん（遠山景元）」よろしく刺青をしていたという説話もあるという。

さらに鎮衛は著作「耳嚢（耳袋）」でも知られている。これは、鎮衛が佐渡奉行在任中の天明五年頃から亡くなる直前まで三十年以上に亘って書き溜めた世間話の随筆集である。同僚や古老から聞き取った珍談・奇談が記録され、全十巻千編もの膨大な量に及ぶ内容は、公方から町人層まで身分を問わず様々な人々につい

ての事柄が取り上げられている。なおこの「耳嚢」は現在でも岩波文庫全三巻、平凡社東洋文庫および平凡社ライブラリー全二巻などで見ることが出来る。
藤九郎と与五郎は早速待合の部屋に案内されたが、しばらく待つと奉行根岸鎮衛は、
「これは藤九郎さま。お久しぶりでございますな。ただいま下城して戻ったばかりだったので些かお待たせいたしました」
と笑顔で入って来た。
「そういえば藤九郎さま。過日はまたまた高麗人参をいただき、いつも有り難く頂戴しておる。奥が病弱なのでな、大いに助かっております」
「我が屋敷の畑で栽培が叶っておりますのでな、ほんの少しのお裾分けでござる。
今日はまた、是非お教えいただきたい儀がございましてな…」
と藤九郎は話を切り出した。
「ううむ…。耳の痛いことじゃが、奉行所も大体のことは承知しておる。しかし奉行の一存でどうこうできることであれば是非なんとかしたいと思い、何度か調べさせたり改善要求を出しておるが根が深い問題でございましてな…」

根岸は苦渋の表情を浮かべて話しを続けた。
「実はな、藤九郎さま。寛政五年と言いますから十二年前にも多紀どのが当時の若年寄堀田正敦さまの諮問を受け、養生所改善策を検討したことがございました」
「ほう、多紀と申されると奥医師であの医学館の多紀どのでございますかな」
「さよう。幕府の諮問は、養生所を医学館が管理することの是非、養生所移転の是非、そして養生所の運営方法についての存念を述べよというものでした」
「養生所を医学館が管理することの是非…という諮問が出るとということは当時から養生所は深刻な問題を抱えていたわけですな」
「さよう。これに対して医学館の答えは、これまで通り奉行所の支配であるべき、移転の必要はない、そして養生所付医師による診療を監督する世話役を新たに置き、世話役と養生所付医師の選択は医学館で行うことを答申されたという…」
「なるほど。しかし医学館で世話役と養生所付医師の選択をすべきという点は却下されたわけですな」
「まあ、役人仕事と言われればその通りなのだが、大きな理由としてその年の七

松平藤九郎 20210323 hagaromo

月に医学館を庇護されていた松平定信さまが失脚なさったのでうやむやになってしまったようです。

ところで藤九郎さま…」

「はい」

「貴殿が小石川養生所に目をお向けになる理由はどこにおありなのでしょうかな」

根岸は何故藤九郎が小石川養生所のあれこれを気に掛けるのかを不思議に思ったようだ。

「これは説明不足で失礼いたしましたな。

実は当家の初代当主松平春貞は小石川養生所が享保七年(一七二二年)十二月初旬に開設されたおり、これまた初代肝煎り小川笙船先生のお手伝いをと開設準備に走り回っていたそうなのです。

その笙船先生とのご縁で当屋敷の向島診療所ができたわけでして、それがしは残念ながら笙船先生とはお会いしたことはございませぬが、屋敷の者達の中にはそのお姿がいまだに目に焼き付いていると申す者達もおりましてな、僭越ながら同じ庶民の医療にたずさわるものとして小石川養生所の行く末には些か気になるの

松平藤九郎5 20210323 hagromo

でございます」
藤九郎が説明すると、
「なるほど。しかし、どうされますかなこれから…」
根岸は奉行の顔に戻って問うた。
「お奉行。お上のできぬことを一介の浪人集団に代わりができるはずもございませぬ。しかしその実体を知った上で例えば不足の薬類や器具などを提供させていただく程度のことはできましょう。
本来なら向島診療所も入所設備があれば理想なのですが、それには人材も人手も不足ですし支えていくことは無理だと思い、開所当時から診療のみとしておるわけです。
さきほどお名が出た多紀元簡（もとやす）どのの医学館でさえ私塾では運営できず、あの目黒行人坂の大火以降苦慮され寛政三年といいますから十四年前に官立となりましたな。ですから養生所をどうのこうのと出来るわけもございませんが、その実体を調査できれば実態に合わせたお手伝いもできようかと思いまして、ひとつお奉行にお許しをいただきにまいったのです」

松平藤九郎 20210323 ©

藤九郎も真顔で言い切った。
「ふむ。なんなりと申されよ」
根岸も真顔で答えた。

それから四半時後、奉行所を後にした藤九郎と与五郎だったが、
「御館さま。お奉行の申されようをお聞きしてますと、そもそもお上は小石川養生所より医学館を頼りにしておるように思えますが…」
と疑問を呈した。
医学館は明和二年（一七六五年）十二月、幕府は奥医師多紀元簡の願いを入れ、その私塾の医学館での医学講義の聴講を幕医の師弟を始め、藩医や町医にいたるまで医学を志すすべての者に許可する町触を江戸の町に発した。
当時は、医師の国家試験も免許制度もなく、まさに病人にとって医師を選ぶこととは自らの生死を選ぶことであった。
多紀はこうした現状を踏まえ、「医術とは人の生死にかかわるものである以上、技量が未熟で学問も浅い医師が多いと、人は横死を免れえない。よって、未熟な医師を集め、自ら医学教育を施したい」と幕府にかねがね願いでいた。医学館は

松平慶九郎 20210323 ISBN

神田佐久間町の空き地に置かれたが、その土地には以前幕府の天文測量所が置かれていた場所だった。
この一五〇〇坪の土地を幕府は多紀に貸し与えたのである。
土地の提供はもとよりそこでの開講を町触で知らせて聴講を奨励するなど、医学館での医学教育は事実上幕府の後継事業といえるものであった。
したがってというべきか、以後多紀は医学館を拠点に医療行政に影響力を行使するようになる。
また医学館は教育活動だけでなく百人と定められてはいたものの診療を求めてやってくる患者に対して無償で診察をしていた。
「俺は医療のあれこれは分からんが、もし向島診療所が利益を追求する医療機関だったら当然医学館との折り合いは悪かろうな」
藤九郎は与五郎に向かって答えるように言った。
「はい。肝煎りからお聞きしたことですが医学館が官立となってからは幕命と称し、医学館から度々の寄付の依頼があったそうでございますな」
「うむ。俺も話しだけは聞いておる。当時の肝煎りであった新界先生は心の広いお方故、火事で再建に奔走している医学館に要求以上の寄付をしたそうじゃ」

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

「はい。しかし一般の町医者からすれば幕府の権威を笠に着た所業と大変評判は悪かったようです…」
「うむ。ともあれ向島診療所は申すまでもなく本道だけでなく蘭方医として知られるようになったから医学館の本道のみの診療所とは一線を画することができている。
ともあれ多紀の小石川養生所に対する見解は決して間違ってはおらぬが、その答申に対しても幕府は具体的な動きを示せないのだから根は誠に深いのだろうよ」
藤九郎と与五郎は顔を見合って頷いた。
すでにあたりは真っ暗闇になっていたが二人は大川を渡ろうと浅草を通り吾妻橋のたもとに来たとき、二人の足がぴたりと止まった。
「なにものだ…」
与五郎が声を上げると、
「命が欲しければ懐のものと両刀を置いて去れ。さもなくば斬る」
と七人ばかりの男たちが暗闇から出てきた。
「物取りか。命は欲しいが、馬鹿にやる金など一文もねえな」
藤九郎が呟くと七人が一斉に刀を抜いた。

松平藤九郎 20210323 hagaromo

「ふむ、少しはできるようだが俺たちには勝てまいよ」
藤九郎の言が終わらない内にそれぞれが切り込んできたが、藤九郎と与五郎に刃を向けるとは狂気の沙汰だった。
二人の体が静かに揺れたとき悲鳴が上がり一瞬で四人の腕が刀ごと切り落とされていた。
「おのれ」
頭に血が上ったか、残りの三人が一斉に藤九郎に向かってきた…。
与五郎は、
(御館さまはあの異能をお使いになるか…)
と思った刹那、一人の首が飛び、返した刀で他の二人は胴を抜かれ、背後の土壁に吹っ飛んでいた。
刀を拭いながら与五郎は、
「御館さま。異能はお使いになりませんでしたな」
と問うと、
「俺の力はまだ相手の命を取るまでには至っておらぬ。あのような者は我らが穏便に退けたところでまた別の者を襲うであろう。だから切り捨てた」

藤九郎は事も無げに言い切った。そして、
「問題が山積みなのは養生所だけでなく、世の中…世相も同じよなあ」
と星空を仰いだ。

四

六日が過ぎた頃、又八は藤九郎らに命じられ酒と銭三百文を持って小石川養生所に家族だと言って田次郎を訪ねた。
その頃、入所から四、五日後に看護中間への挨拶料という名目で銭を差し出す習慣ができていたからだ。万一にも田次郎が極悪な環境で虐めにあってはとの配慮だった。
「田次郎に見舞いにきたんですがな」
又八はそう言いながら面会を求め、古株の看護中間とみられる男に酒瓶と銭を差し出すと、

「おう、これはすまねえな。田次郎とかはお前さんの兄さんかえ。いま縁側にいるからこちらから回りなせえ」
と思ったより機嫌良く対応してくれた。
勘介が縁側に近づくと驚いたことに田次郎は看護中間の一人と将棋を指していた。
「兄貴、どうだい…元気そうじゃあねえか」
又八が声をかけると田次郎は、
「おお、忙しいところ悪いな。
おっとこちらは中間の弥太郎さんだ。よくしてもらってるぜ」
と片目を瞑ると弥太郎と紹介された男は軽く頭を下げた。
どうやら小銭を効果的にばらまいただけでなく、如才なく中間たちの懐に飛び込むことなど田次郎にとっては容易いことだったようだ。そして、
「親方に俺は大丈夫だと伝えてくれ。足腰が立つようになったら早めに退所させてもらうからよ」
と駒を指しながら呟いた。
又八は屋敷に戻り藤九郎に報告すると、

松平慶九郎5 20210323 hagoromo

「彼奴め、伊達に歳は取ってねえなあ。しかし呆れたな…」
と声を出して笑った。
それから早くも二十日経った…。
桜も葉桜になった頃、道場から母屋に向かっていたおかよが開き門の前にいる男たちに気づき駆け寄った。
「ご用でございますか…」
最近ではおかよも武家の娘らしくなりつつあった。
「わたしは医学館の多紀と申します。こちら向島診療所の肝煎り井之上先生にお目にかかりたいのでお取り次ぎを」
髪を綺麗に剃った大柄で恰幅のよい男がそう願った。
多紀と自称した男はすぐに母屋の客間に案内されたが二人の若い男は弟子なのか、部屋に接する廊下に座した。
診療中ではあったが新一郎がすぐにやってきたが、その後から藤九郎も顔を出した。
「これはお忙しいところと承知しながらも是非お目にかかりたく罷り越しましたが、医学館を主催する多紀元簡と申す」

松平藤九郎 20210323 hagaromo

畳みに両手の指先を付けて挨拶をした。
「これは、奥医師のお方にご丁寧なご挨拶、痛み入ります。私が井之上新一郎ですが、こちらは当屋敷の当主、松平藤九郎でございます」
と新一郎が藤九郎を紹介した。
このとき多紀は五十歳、新一郎は五十六歳だった。
「これは、いきなりお伺いして申し訳ございません。
それに…奥医師とご紹介いただきましたが、いまは奥医師ではございません」
多紀はつるつるの頭を右手で撫でながら苦笑した。
「ほう、それは…」
「私事ですが、享和元年（一八〇一年）でしたが、幕府の医官の選抜方法に関して不満を直言したのが原因で奥医師を免ぜられまして…いまは寄合医師に左遷されております。
どうにも医療のことになると妥協ができない性格でございましてな、嫌われることも多く損をしております」
とこともなげに言った。ただし文化七年（一八一〇年）に再び奥医師として召し出されたが、その年の十二月二日に急死している。

「世渡りは難しいものでございますからな。
我らは幸い幕臣でもございませんので気が楽でございます」
藤九郎も気さくに対応した。
「これは、恐れ入る…」
茶と茶菓子を運んで来た長坂角之新の妻淑子に多紀は頭を下げ、
「松平さま、新一郎どの…。どこかの隅からでも結構ですので向こうの弟子二人と共に向島診療所を拝見させてはいただけまいか」
と切り出した。
「それは…」
一瞬藤九郎と新一郎が目を合わせた。
「いや、口うるさいと言われている私のこと、偵察にでも…とお疑いかも知れませぬがそうではございません。
申すまでもなく我らは本道の医師…漢方医。長い歴史の中で培われた技術と知見の積み重ねに信頼と医療効果もありと自負しております。しかし昨今は蘭方医が幅を…いや、これは失礼、蘭方こそ最新の医療だと公言してはばかりませぬ。
世間では多紀は本道に凝り固まった男で他のことには耳も貸さないと陰口をたた

松平藤九郎5_20210323_hagoromo

く者もおりますが、私は患者をあるべき姿に正すためには本道も蘭方もないと思っております」

「……」

「ただし、我らは本道しか知りませぬ。では蘭方を勉強し優れたところは見習って…と申したいところですが、その機会がまったくと言ってございませぬ。本来なら長崎で数年かけて経験を積むべきでしょうが、私の固い頭ではそもそもが無理だと理解しております。また蘭方の神髄をとその最新の医療現場を見たいとしても町医者は警戒し耳を貸してくれませんし、見学ができるにしてもその環境は本道のそれとあまり変わらないのが現状。

その点、こちらの診療所は我が国で類を見ない設備環境と実際に長崎で勉強されてきた井之上先生らが日々患者の命を救っておる事実の積み重ねがございます」

一息入れ、眼前の茶に手をつけつつ多紀は続けた。

「ということで、厚かましいお願いですが本物の蘭方医の働き場所を知りたいと思う時、こちら様しかないと気づいたのです。

どうか見学させていただけませぬか…」

新一郎はチラリと藤九郎を見て頷き、

「承知しました。お眼鏡にかなうかは存じませんが、これからご案内いたしましょう」

そう言いながら立ち上がり、多紀と二人の弟子を誘って診療所の控え室に入った。ここからは小窓を開ければ診療室の全容が確認出来るのだ。

向島診療所は二度目の建て替えの際に拡張しただけでなくその建屋も当時としては斬新な漆喰作りの建屋であり、自然光を十分に取り入れようと三方に大きな窓があるだけでなく天井の一部も開け閉めできる窓になっていた。

無論肝心の設備も当時としては最新のものであり、新一郎の実父井之上新界が蘭書などから、あるいは江戸に通詞として来た際に阿蘭陀の医師たちに問いただしたことなどが活かされていた。

その日も朝から多くの患者が来診のために並んでいたが、時は昼時になり人の波も少なくなっていた。

新一郎の勧めで小窓から診療室を覗いていた多紀は思わず声を上げるほど、それまで見聞きしていた蘭方の医療現場と大きく違うその実態に驚いていた。

丁度昼時となり、半時ほど休診となったその時間を利用し新一郎は、

「多紀さま。よろしかったら診療室へご案内いたしましょう」

と誘った。
多紀元簡は一瞬息を飲んだ後、しばし無言で部屋中を歩き回っていた。それぞれの仕切りで午前中の診療の後始末をしていた吉太郎、お輝、与五郎らは肝煎りが連れてきた人物が誰だか分からないままに会釈しながら仕事を続けていたが、多紀の表情は興奮しているのが誰が見ても分かるほどだった。
特に今は亡き井之上新界が集めた阿蘭陀渡りの手術道具類を見たときには質問が相次いだ…。
あっと言う間に半時が過ぎ、診療所は午後からの診療準備にとりかかりはじめたので新界は頃合い由と見たのか、多紀を誘って客間に戻った。
座した多紀はあらためて新一郎に頭を下げ、
「井之上先生、大変勉強になりました。医療には知識と経験そして技術が大切と考えております。そして短い時間ながら手術道具を拝見し、確かに阿蘭陀のものは我らが使っておるものとはまったく違うと思われる…それでいて効果的と思われるものが多々ありました。
無論これまで本道一筋で歩んできた我らがすぐに使いこなせるとは思いませんが、いまいくつか頭の隅にこびりついている懸案事項も解決するのではないかと

いう直感も得られました。
御礼申します」
と言い切った。
「多紀先生。もしかしたらお聞き及びかと存じますが、実父井之上新界は長崎で阿蘭陀医学を学びましたが満足できず、帰路の足でここ向島診療所におられた本道の医師、小川笙船先生を訪ねてその門下に入ったと言います。
要は針灸もよき例ですが、我らはその伝統から設備や主な取り組み方は蘭方ですが、本道のよきところは積極的に採用しております。
これからも機会がございましたらご指導願います」
新一郎は笑顔で多紀に語りかけると、
「いきなり押しかけ、まことにご無礼申しましたが伺って良かった…」
と新一郎の両手を取って頭を下げた。

松平藤九郎5 20210323 hagoromo

五

藤九郎と新一郎は門前まで多紀を見送ったが、
「噂では傲慢で人の意見を聞かない人物と言われておりましたが、まずは良かったです」
新一郎がホッとした様子で藤九郎に言うと、
「世間の評判など一番当てにならぬものはないだろうよ。あのお方も己の信ずるところを譲らずに突き進んでおるようだし、事実お上に思いのままに進言し御典医資格を取り下げられたお方。確かにうるさ方だが、あれもひとつの人生よなあ」
藤九郎は呟いた。
それから十日経った小雨降る昼過ぎ、勘介に連れられて一ヶ月小石川養生所に入所していた田次郎が駕籠で戻ってきた。
風呂に入ってさっぱりした田次郎は血色も良く足腰以外は元気そうだったが、夕餉の席に座したとき涙ぐんでいた。

「どうしたい田次郎さん。今夜はお前さんの退所祝いも加味しておるそうだぜ」
又八が隣で肩を叩くと田次郎は居住まいを正し藤九郎に向かって頭を下げた。
「どうした田次郎…」
藤九郎が声をかけると、
「今更でございますが、しみじみ御屋敷がありがたいところだと身にしみまして
な」
田次郎が袖で涙を拭いた。そして今夜の話題は田次郎の養生所入所体験の話しで
盛り上がった。
食事も終わり、女衆が箱膳を片付けた後、藤九郎は、
「田次郎、食事中は話せぬ話題もあろうが、お前の感想はどうだ…」
と問うた。
田次郎はどこから話そうかと少し思案していたが、
「御館さま。結論めきますが昔の養生所がどうであったかは知りません。しかし
今の養生所はひでえところでした。
順にお話しいたしますが、やはりお聞きしていたとおり、ある程度の金がないと
看護中間らの扱いが極悪となります…」

松平健九郎5 20210323 ISBN

「極悪とな…」

「へえ。中間らの求めに応じられないと日当たりが悪いだけでなくとても汚い部屋に移され病が重くなってしまう患者もおりますようで。

あっしはお陰様で中間たちの印象もまずまずでしたが、あるときその一番酷い部屋というのを覗いてみましたが、いやはや何と言うか、部屋の扉を開ける前から異臭が酷く吐きそうになりやした」

「なんと…」

「また入所する際の挨拶として銭を渡すだけでなく日々飲食物の押し売りもございました。

へえ、養生所には八百屋、豆腐屋、肴屋などがやってきますが、中間たちはそれらから飲食物を買い、入所者に売りつけるのでございますよ。欲しい者、金のある者にとっては便利かもしれませんが、不用な者や金がないものは本来買いたくないわけですが無理強いするのです。無論仕入の額に自分たちの利益を乗せて売る訳ですが中間らの中には金が無いなら貸してやると金貸しで利益を得ている者もおりました」

思い出すのも嫌だという体で田次郎は続けた。

「まだまだ不正はございましたな。
病人たちは総じて食欲がございません。それに目を付けた中間たちは残飯を集めて近隣の長屋に住む貧しい者たちに売りさばくだけでなく、主に米ですがどうせ余ると嘯き、最初から何割かを抜き、売りさばく者。さらに汁物にしても実や出汁の鰹節などの金も支給されているのに代金を着服するため、塩味のない不味い汁でした」
想像した以上の凄さに藤九郎も新一郎も声が出なかった。
「まだまだ細かいことは多々ございますがね皆様、極めつきは夜な夜な博打が開帳されていたのにはあっしもびっくりしましたぜ」
「養生所で博打だと…」
「へえ。でもね、ご存じのようにあっしの唯一の取り得は賽子でございますから勝ちが重なりましてな、数日の内に中間たちはあっしを胴元として雇ってくれましたので待遇はよございました」
田次郎は頭を掻きながら言った。
「ひでえことだな。で、その巻き上げた金はどうした」
与五郎が思わず声を上げると田次郎は、

「あっしの取り分をすべて中間たちの目の届かないときに、負けた者達に戻してやりましたからこれまた入所者たちからも感謝されましてな…」
「言いたい放題をいいやがる」
与五郎も呆れた。
「入所者の待遇については分かりましたが、医者たちや見廻り同心たちは見過ごしておりますのか」
静香が質問をした。
「そのことでございますよ…」
田次郎が言うには、そもそも同心たちや医師たちがしっかりしておればこんなことにはならないと唾を飛ばした。
「養生所見廻り同心や与力の方々は総じて不熱心でございますな。見廻り方は二人おるそうで一日交替で養生所に出勤しますがその実、遅刻と早退けが多く見廻りにしても遠くからちらっと見るだけで…。
まあ事実上、中間たちの不正も見て見ぬ振りでございました。
与力やらの不熱心の原因はいくつかございますようで…」
「聞かせてくれ」

「一番は手当の少なさがやる気のなさの原因ですな。小耳に挟んだ話によりますと例えば一般的な与力方は暮れになると十両、同心方は三両の褒美銀が出るそうでございますが、どうしたことなのか養生所に配属された与力同心たちへはこの種のお手当が出ないそうですな」

「ふうむ…」

「また役宅のある八丁堀から養生所は遠いということもお役人たちのやる気を削ぐ理由になっていると思われます」

「よう調べてくれた。最後に医師たちはどうじゃ」

藤九郎が問うと、

「お医師の先生方も肝煎りの小川先生ともうお一方を除いて中間達と似たり寄ったりでございましたな」

「なんと…」

「なんとかという外科の先生は出勤は遅いし診療もいい加減で薬もほとんど使わないと言われておりましてな、患者からは別のお医師に変えて欲しいという要望まで出たようで…。

御館さま。これでは入居者が減るのも当然でございますよ。

先ほど西脇の旦那から、御館さまと共に南町のお奉行にお会いしたと聞きましたが、言ってはなんですが奉行所は手の打ちようがないのでございますよ。
これまで何度も改善策を打ち出したり改善命令をお出しになっているそうですが、効果のある具体的な策など一度も出したことがないとこぼす入居者もおりましたな」
と田次郎の話しは終わった。
しばしの沈黙の後、
「さて、田次郎さんの奮闘で小石川養生所の現状はほぼわかりましたが、御館さま。これほど深刻な問題を抱えているとなれば、あの医学館が改善を要求するのも当然ですが、我らがどうこうできる問題ではございませぬな」
久世仙之助が苦渋の表情で言った。
ここ、向島診療所肝煎りの井之上新一郎も、
「大元は役人や中間達の待遇が悪いことは明白ですが、では金を投入すれば問題が全て改善するかと言うと、無理なようにも思えますな。そして長崎での師、吉雄耕牛先生は組織は腐敗するのは早いが良くする為には膨大な努力がいるとおっ

松平藤九郎 20210323 hagaromo

しゃられておりましたな」
と言う…。
「あたしなどが言うのも僭越だけどさ、あの笙船先生は常々『向島診療所のお役目は、小石川診療所に漏れた患者たちの一助になれば』とおっしゃっていたけど、変な風になってしまったねえ」
お文が残念そうに呟くと一同も頷いた。
すると吉太郎が、
「御館さま、肝煎り…。小石川養生所ありても、また医学館ありても我ら向島診療所はそれらと競争する必要もなければ競合する必要もない特別な医療機関です。我らはこれまで通り日々通ってくる患者のために最善を尽くすしかありませんな」
というと藤九郎が大きく頷き、
「どうだな肝煎り、吉太郎先生。我らも人手不足は免れないから急ぎという話しではないが、この診療所にも江戸の町医者は勿論、関東各地の村医者の若い医者を集めて無料で医療教育を受けられるような体制が取れないものかのう…。また単に講義を受けるだけでなく一定水準の技量を持った者には患者に対して治療を

行えるまでにしたものよ。そうなれば結果として人手不足も解消するかも知れないではないか。
聞いたところでは亡くなられた大先生の若い頃は、この診療所で駆け出しの蘭方医たちに教義をされておったそうな…。
ただしそのためには肝煎りを始め、先生方の一層の力が必要になるがのう…」
と話すとこれまた一同から拍手が起こった。
時は文化二年（一八〇五年）梅雨時のことであった…。

あとがき

まだまだ続いてます（笑）。

今回の主なテーマは小石川養生所の腐敗についてである。本時代小説の第一巻は小石川養生所の開所直前から話しがはじまっているが、すでにそれから時代設定は八〇余年も経っている。

小川笙船という町医者が目安箱に投げ入れた訴えに時の八代将軍吉宗が目を付け貧しい人たちのためにと小石川養生所開設の運びとなったのだった。この養生所の医師たちの葛藤は「赤ひげ」に代表されるように様々な小説や映画、時代劇の題材として使われてきたが、史実として文化文政くらいになるとその腐敗は目に余るものとなっていった。

問題は管轄の町奉行所が本腰で事に当たらず何度も改善策や御触が出たものの現実は一向に良くならなかった。

結局紆余曲折の上、明治になって新政府は旧幕府の施設を接収していき、江戸が東京と改められた際に小石川養生所は小石川貧病院と改称され施療活動を継続したものの、その後小石川貧病院は廃止となり、ここに小石川養生所は名実と共に

松平慶九郎5 20210323 hagoromo

その幕を閉じることになる。
ただし「江戸の養生所」ＰＨＰ新書の著者である、安藤優一郎氏は、小石川養生所の至らぬ点を単に窮民救済に対する幕府の消極的姿勢に帰することはできないとし、コミュティの問題や、人間社会のより奥深い側面、すなわち、看護・介護という超歴史的な仮題が背後には横たわっていたことを無視することはできないとしている。
このことはある意味で現代の看護・介護にも通じる大変難しい問題を根に持っているのだといえよう。
さらに安藤優一郎氏は小石川養生所とは「小説や時代劇の世界だけでのものではなく、現代の教訓にすべき江戸の遺産のひとつ」と結んでいる。
小石川養生所の失敗は決して他人事ではないと…己も高齢者になった筆者として胸に迫るものがあった。

東京都多摩市の仕事部屋にて

二〇二〇年十月吉日

松田　純一

松平慶九郎5_20210323 hagoromo

主な参考文献・資料

安藤優一郎「江戸の養生所」
ディアゴスティーニ「週刊江戸　小石川養生所の開設」
酒井シヅ「まるわかり　江戸の医学」
青木歳幸「江戸時代の医学　名医たちの三〇〇年」
菊池ひと美「江戸衣裳図鑑」
菊池ひと美「江戸の暮らし図鑑」
菊池ひと美「江戸おしゃれ図絵」
菊池ひと美「お江戸の結婚」
江戸人文研究会「イラスト・図説でよくわかる江戸の用語辞典」
江戸人文研究会「絵で見る江戸の人物辞典」
野火迅「使ってみたい　武士の日本語」
山田順子「江戸の暮らしがわかる本」
稲垣史生「江戸時代大全」
大森洋平「考証要集　秘伝！ＮＨＫ時代考証資料」

松平健九郎 5 20210323 hagaromo

人文社「切絵図・現代図で歩く　江戸東京散歩」
立川博章「大江戸鳥瞰図」
柳生宗矩／渡辺一郎「兵法家伝書　付・新陰流兵法目録事」
村山知義「無刀の伝　柳生新陰流極意」
新人物往来社「剣の達人一一一人　データファイル」
人文社「江戸庶民の食風景　江戸の台所」
松下幸子、榎木伊太郎「再現江戸時代料理」
江戸風土研究会「地図で読み解く江戸・東京」
深井雅海「江戸城御庭番―徳川将軍の耳と目」
若桜木虔「御庭番通史」
氏家幹人「大江戸死体考―人斬り浅右衛門の時代」
塩見鮮一郎「弾左衛門とその時代」
塩見鮮一郎「資料　浅草弾左衛門」
笹間良彦「図説・江戸町奉行所事典」
笹間良彦「復元 江戸生活図鑑」
Wikipedia

本書の無断複写・配布は著作権法上での例外を除き禁じられています。

松平藤九郎始末（五）　　腐敗
（まつだいら　とうくろう　しまつ）
首巻き春貞外伝

2020年10月31日　第一刷

著者：松田純一（まつだ　じゅんいち）

http://www.mactechlab.jp

表紙デザイン：Junichi Matsuda